平成29年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

実践事例集

目　次

１．実践事例集について …… 1

２．実践事例

スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意識や歴史に関する学び

宮古市立山口小学校（岩手県）…… 3
栗原市立栗駒中学校（宮城県）…… 7
仙台市立田子中学校（宮城県）…… 9
福島市立吉井田小学校（福島県）…… 11
金沢市立北鳴中学校（石川県）…… 13
岐阜県立関高等学校（岐阜県）…… 15
伊豆の国市立大仁中学校（静岡県）…… 17
兵庫県立社高等学校（兵庫県）…… 19
高知県立高知丸の内高等学校（高知県）…… 21
札幌市立信濃小学校（札幌市）…… 23
札幌市立澄川小学校（札幌市）…… 25
千葉市立蘇我中学校（千葉市）…… 27
北九州市小森江東小学校（北九州市）…… 29

マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成

水戸市立緑岡中学校（茨城県）…… 31
流山市立小山小学校（千葉県）…… 33
松戸市立小金中学校（千葉県）…… 35
岐阜県立岐阜盲学校（岐阜県）…… 37
岐阜県立岐阜聾学校（岐阜県）…… 39
糸島市立前原東中学校（福岡県）…… 41

スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築

盛岡市立上田中学校（岩手県）…… 43
千葉県立矢切特別支援学校（千葉県）…… 45
岐阜県立関高等学校（岐阜県）…… 47
京都府立聾学校（京都府）…… 49
京都市立日吉ケ丘高等学校（京都市）…… 53

日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

白石市立大平小学校（宮城県）…… 55
南三陸町立志津川小学校（宮城県）…… 57
成田市立久住小学校（千葉県）…… 59
松戸市立大橋小学校（千葉県）…… 61
能登町立宇出津小学校（石川県）…… 63
京都府立西乙訓高等学校（京都府）…… 65
福山市立霞小学校（広島県）…… 67
大阪市立木川南小学校（大阪市）…… 69
北九州市立長尾小学校（北九州市）…… 71

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

盛岡市立厨川中学校（岩手県）…… 73
筑西市立新治小学校（茨城県）…… 75
千葉県立一宮商業高等学校（千葉県）…… 77
千葉県立桜が丘特別支援学校（千葉県）…… 79
伊豆市立修善寺南小学校（静岡県）…… 81
東広島市立小谷小学校（広島県）…… 83
久留米市立大城小学校（福岡県）…… 85
みやま市立二川小学校（福岡県）…… 87
長崎市立横尾中学校（長崎県）…… 89
山鹿市立山鹿中学校（熊本県）…… 91
熊本県立松橋支援学校（熊本県）…… 93
千葉市立蘇我小学校（千葉市）…… 95

実践事例協力校一覧 …… 97

実践事例集について

本事例集は、平成 29 年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」において、各地域拠点の推進校で実施されたオリンピック・パラリンピック教育の特徴的な事例を集約したものである。後述する 5 つのテーマ別に、全 20 地域拠点における 45 事例を選定しその要旨を掲載している。平成 30 年度以降の有意義な事業展開に向けた参考資料として、また 2020 年の東京大会を契機とした日本のオリンピック・パラリンピック教育に関する記録として活用されたい。

1. 本事業の目的

2020 年東京大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針（平成 27 年 11 月 27 日閣議決定）において、政府は「大会開催を契機に、オリンピック・パラリンピック教育の推進によるスポーツの価値や効果の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて貢献できる人材を育成する」ことを決定した。また、文部科学省およびスポーツ庁で組織された「オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（平成 27 年 2 月～平成 28 年 7 月）」の最終報告では、全国的なオリンピック・パラリンピック教育の普及の意義として、以下の内容が提示されている。

(1) スポーツの価値

・スポーツは、精神的な充足感や楽しさ・喜びをもたらし、人々が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む基盤。
・スポーツには、自己充実・自己変革を促す力、社会や世界を変える大きな力がある。

(2) オリンピック・パラリンピックの理念とオリンピック・パラリンピック教育の意義

・オリパラ教育の推進には、オリンピックの 3 つの価値（卓越 Excellence、友情 Friendship、敬意 / 尊重 Respect）とパラリンピックの 4 つの価値（勇気 Courage、決意 Determination、平等 Equality、インスピレーション Inspiration）が必要。
・オリパラ教育は、スポーツの価値の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に活躍できる人材を育成するもの。

（3）オリンピック・パラリンピック教育の具体的内容

・オリンピック・パラリンピックそのものについての学び（大会に関する知識、選手の体験・エピソード等）
・オリンピック・パラリンピックを通じた学び（スポーツの価値 、参加国・地域の文化等、共生社会、持続可能な社会等）

本事業は、主に上記の内容および平成 27 年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント調査研究事業」の成果をふまえ、全国中核拠点（筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）と地域拠点（各自治体教育委員会等）が連携し、学校や地域一般におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを推進することを目的とするものである。

2．平成 29 年度の事業概要

本年度における全国中核拠点と参加地域拠点を以下に示す。各地域拠点では、担当大学の支援を受けながら、2020 年東京大会に向けたオリンピック・パラリンピック教育の実践を展開した。

筑波大学　　：宮城県、福島県、茨城県、京都府、福岡県、京都市、北九州市
日本体育大学：千葉県、石川県、兵庫県、高知県、長崎県、千葉市、大阪市
早稲田大学　：岩手県、岐阜県、静岡県、広島県、熊本県、札幌市

また各推進校では、以下の５つのテーマに基づきオリンピック・パラリンピック教育が実践された。なお、同テーマはスポーツ庁および関係団体（内閣官房オリパラ事務局、東京 2020 組織委員会、東京都教育庁、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター、筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）から構成される「スポーツ庁オリンピック・パラリンピック教育全国中核拠点会議」において議論され、決定されたものである。

（本事業における「オリンピック・パラリンピック教育」のテーマ）

オリンピズムの教育的価値（努力から得られる喜び、フェアプレー、他者への敬意、卓越性の追求、身体・意志・知性の調和）、パラリンピックの価値（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）の普及に向けて、以下のテーマを設定する。

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通したインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

本事例集では、各地域拠点の推進校における「実践報告書」の文面を抜粋し、冊子体裁の都合上、一部編集･用語の統一を行っております。なお複製、転載等の際には、スポーツ庁による承認手続きが必要となります。

実践事例１　宮古市立山口小学校（岩手県）

1 取組、活動名

オリンピアンの講演及び実技指導

2 実施対象者

中学年 78 名（第 3 学年 42 名、第 4 学年 36 名）
高学年 65 名（第 5 学年 42 名、第 6 学年 23 名）

3 展開の形式

教科名：総合的な学習の時間「オリンピック、パラリンピックを学ぼう」

4 目的、ねらい

○ 2020 年東京大会に向けて、オリンピック、パラリンピックへの関心を高め、スポーツの価値や効果の再確認を通じて、国際的な視野をもって世界の平和に向けて貢献できる人材を育成する。具体的には、スポーツの意義や価値等に対する児童の理解、関心を向上させる、児童のスポーツへの主体的参加の意識を向上させる、これからの社会に求められる資質、能力等の育成を図る。

5 工夫

○オリンピック、パラリンピックへの興味や知識のない児童に学習意欲をもたせるために、内容をクイズ形式にしたり、言葉を平易なものに置き換えたりして指導した。
○学習意欲を持続させるために、短期間で重点的に学習を進めた。
○学級担任の負担を軽減するために、事前事後の学習はオリパラ担当教員が全学年の授業を行った。

6 取組内容

(1) 事前学習（2 時間）
○オリンピックって何？（オリンピッククイズ）
○オリンピックの歴史
○日本人の活躍（オリンピアン紹介含め）
※「オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料」活用

＜3、4年生の事前学習の様子＞





＜5、6年生の事前学習の様子＞





(2) オリンピアン（田中和仁氏：体操）による実技指導（1時間）

○マット運動（前転、後転、開脚前転）





(3) オリンピアン（田中和仁氏：体操）による講演（1時間）

○「オリンピックに向けての道のりと体操から学んだこと」





(4) 事後学習①（2 時間）
＜ 3・4 年＞
〇オリンピック・パラリンピック・ムーブメントを学ぼう！
～ 2020 年東京大会に向けて～
〇 2020 年東京大会の実施種目を知ろう
〇シッティングバレーボールに挑戦！
〇オリンピック、パラリンピックのマスコットを選ぼう

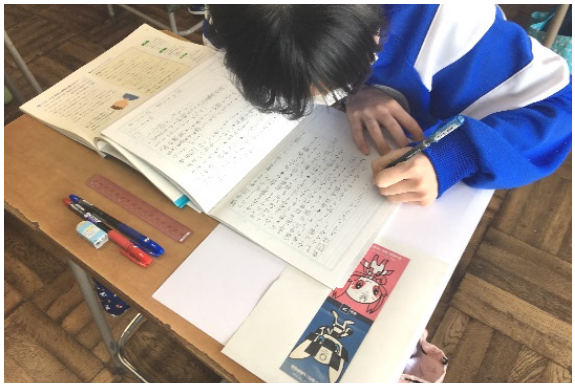



＜ 5・6 年＞
〇オリンピック・パラリンピック・ムーブメントを学ぼう！
～ 2020 年東京大会に向けて～
〇世界に日本をアピールしよう！
〇 2020 年東京大会の実施種目を知ろう
〇オリンピック、パラリンピックのマスコットを選ぼう




(5) 事後学習②
＜ 3 年生以上の各学年＞
〇マスコット投票に向けた話し合い









7 成果

(1) クイズや映像資料を用いた事前学習により、オリンピック、パラリンピックの理念や歴史についての理解を深めることができた。
(2) オリンピアンによる講演と実技において、一流の選手の考え方や動きを直接見聞きすることで、オリンピックに出場することの大変さやオリンピック選手のすごさを実感させることができた。
(3) 事後学習においては、日本の魅力を考えたり、パラ競技の一部を体験したりすることを通して、2020 年東京大会を実際に見てみたいと思う気持ちを高めることができた。

8 課題

(1) 事業が決まったのが年度後半だったため、他教科や領域に関連付けた学習が十分に実施できなかった。
(2) オリンピアンとの事前の打ち合わせができなかったため、講演内容や実技指導の進め方（場の設定等）について、オリンピアンの意向を十分に反映させることができなかった。

実践事例２　栗原市立栗駒中学校（宮城県）

① 取組、活動名

体育祭におけるオリンピック種目「綱引き」（1900 ～ 1920）の実施

② 実施対象者

全校生徒 278 名

③ 展開の形式

行事名：校内体育祭

④ 目的、ねらい

オリンピック、パラリンピックの精神を学ぶと共に、日本の良さの再発見と体力の向上を図る。

⑤ 工夫

オリンピック種目であった「綱引き」を実施するとともに、車いす生徒も含めた全生徒が安全に競技に参加できるように配慮した。

⑥ 取組内容

本校では、毎年９月上旬に校内体育祭を開催している。今年度は、オリンピック、パラリンピックへの知識・理解を深めさせるために、1900 年パリ大会から 1920 年アントワープ大会までオリンピック種目となっていた「綱引き」を取り入れた。

2002 年２月ソルトレイクシティで開催された国際オリンピック委員会総会において、国際綱引連盟（TWIF）が IOC に正式加盟が認められ、オリンピック復活が期待されている競技の１つであるという説明を、ルールを確認するときに取り入れた。本校には、車いすで生活をする生徒もいるが、その生徒も一緒に競技に参加し、身体に障がいを抱えている生徒に対する配慮やそれを受け入れようとする気持ちの育成にもつながったと考えられる。





7 成果

校内体育祭実施後に行った全校生徒対象のアンケートでは「友人の良いところを見つけられましたか？」という質問項目に対して、「よくできた」が63%、「まあまあできた」が29%という回答となり、多くの生徒が友人の良いところを見つけられたと回答した。

8 課題

○校内体育祭を実施するにあたり、オリンピック、パラリンピックの関連を図った競技を１つしか入れることができなかった。
○掲示板等で、オリンピック、パラリンピックに対する気運を盛り上げる工夫が必要であった。

実践事例３　仙台市立田子中学校（宮城県）

1 取組、活動名

運動会で 2016 年リオデジャネイロ大会の開・閉会式を再現

2 実施対象者

第 1 学年（男子 69 名・女子 64 名）（特別支援学級生徒含む）
第 2 学年（男子 58 名・女子 58 名）（特別支援学級生徒含む）
第 3 学年（男子 72 名・女子 59 名）（特別支援学級生徒含む）

3 展開の形式

行事名：運動会

4 目的、ねらい

2020 年東京大会をより身近なものと捉えられる生徒の育成
（教育活動の中で主体的に学び、関心意欲を高める取組を通して、2020 年東京大会への興味関心を高め、3 年後の 2020 年東京大会への期待を膨らませ多様な形（行う、支える、見る、調べる）で携わることができる効果を目指す。）

5 工夫

本年度は「オリンピック、パラリンピックをより身近なものと捉える生徒の育成」を意識した。主体的に学び、関心意欲を高めるために美術部に活動を依頼し、聖火リレーやマリオの登場するオープニングセレモニーで会場は盛り上がった。

6 取組内容

運動会の開会式で、美術部が主体となり 2016 年リオデジャネイロ大会に似せた演出を行った。

各学年の代表生徒 4 名が聖火をつなぐ演出をした。

美術部の生徒が、2016 年リオデジャネイロ大会の引き継ぎセレモニーで安倍首相が演出したスーパーマリオで登場し、会場を沸かせた。

地球の裏側ブラジルから田子中学校へ引き継がれた。



7 成果

取り組み前（5 月）と後（1 月）に以下のアンケートを実施し、正答率の変化をみた。

問 1：次の夏季オリンピックは西暦何年、どこで開催されるか？
　　実施前　259 人　→　実施後　318 人
問 2：オリンピックマークの 5 つの輪の意味を知っていますか？
　　実施前　 88 人　→　実施後　225 人
問 3：第一回のオリンピックが開催された都市はどこですか？
　　実施前　 45 人　→　実施後　222 人
問 4：次のオリンピックが楽しみだ。

実施前	よく思う	167 人	→ 実施後	196 人
	少し思う	119 人		118 人
	あまり思わない	38 人		19 人
	思わない	31 人		22 人

8 課題

アンケートを実施した 355 名の 10%が問 1 を答えられることができなかった。問 4 の 2020 年東京大会が楽しみではないと思っている人も 11%と、全く興味関心がないことは非常に残念な結果となった。この 10%の生徒に興味関心が高められるよう継続的な学習が必要と考える。そのためには、体験的な授業実践や現役オリンピアンを招致する等の活動が必要だったと考える。

実践事例４　福島市立吉井田小学校（福島県）

① 取組、活動名

2020 年東京大会のマスコットを決めよう

② 実施対象者

第 6 学年 1 組　29 名（投票は全校で実施）

③ 展開の形式

教科名：総合的な学習の時間

④ 目的、ねらい

クラスで 1 つのマスコットを選ぶ活動を通して、2020 年東京大会への参加意識を啓発するとともに、オリンピック、パラリンピックについて関心を高めることができるようにする。

⑤ 工夫

マスコットを決めるにあたってのポイントを 4 つ提示し、その 4 つのポイントにそって話し合いをさせる。

1　世界中に好まれるか
2　東京や日本らしさを感じるか
3　個性的なマスコットか
4　オリンピック、パラリンピックにふさわしいか

⑥ 取組内容

1．本時のめあてをつかむ

(1) オリンピック、パラリンピックについてのクイズをする

今までのオリンピック、パラリンピックのマスコットについてのクイズ形式で問題を出し、興味・関心を高める。

(2) めあてをつかむ

本時は、2020 年東京大会マスコット案の中から、話し合いによりクラスで 1 つの案に決めることを確認する（グループ毎話し合いにより 1 つ選ぶ→一番多く選ばれた案をクラスの案として決める）。

(3) 選ぶポイントを確認する

歴代のマスコットがどのような理由で選ばれたのか、選ぶ際のポイント

を考えさせる。マスコットには選手や観客を歓迎するとともに、大会の理念や、開催国の文化や特徴が含まれていることを示し、2020 年東京大会マスコットを選ぶ際のポイントを確認する。

2．マスコットの動画を視聴する
　それぞれのマスコット案について、選ぶポイントを意識しながら視聴させる。

3．グループで話し合う
(1) グループ毎にどのマスコットがふさわしいか話し合う
　3 ～ 4 人の小グループで 3 つのマスコット案からどの案が 2020 年東京大会マスコットにふさわしいかをポイントに沿って話し合わせる。
(2) 発表する
　リーダーを中心に意見をまとめ、発表する。その際に選んだ理由をしっかり示すようにさせる。

4．クラスとして 1 つ選定する
　各グループの発表を聞いて、一番多く選ばれた案をクラスの案とする。

5．本時の学習を振り返る
　マスコット選定に関わったことの感想について発表させる。
　今後、全国の小学生がクラス単位で投票し、2 月にマスコットが発表させることや、マスコットを決めることに自分たちが参加したことで、2020 年東京大会にすでに参加していることを確認し、今後も興味・関心を持続させていく。



7 成果

　低学年ではキャラクターのかわいらしさや親しみ、中学年では日本らしさや選手を応援する気持ち、高学年ではオリジナリティやおもてなしの心等について理解し、選定を通して参加意識や東京大会への関心を高めることができた。

8 課題

　今年度は、「まずやってみる」「できるところから始めてみる」段階であった。学校としての明確なテーマを選定し、「オリパラ教育全体計画」を作成し、教育課程への位置付けをしっかり行って実践していく必要がある。その際は、オリパラ教育と各教科・領域の内容と関連を図り、時間的にも内容的にも無理のないものへとしていく必要がある。

実践事例５　金沢市立北鳴中学校（石川県）

1 取組、活動名

オリンピック、パラリンピックの競技種目に関する新聞の作成

2 実施対象者

第１学年 190 名（1 ～ 6 組）

3 展開の形式

教科名：保健体育、総合的な学習の時間

4 目的、ねらい

(1) オリンピック、パラリンピック競技の調べ学習を通して、ボランティア精神を育成し、国際理解を進める。
(2) スポーツを楽しむ心を育成し、インクルーシブな社会の構築を目指す。

5 工夫

(1) 調べる内容についての必須項目とその具体例を提示したことで、充実した新聞を作ることができた。
(2) 各学級の担当種目を、オリンピック種目、パラリンピック種目それぞれバランス良く配置したことで、これまで自分が知らなかった種目を調べた生徒が多く、新たな知識の獲得につながった。

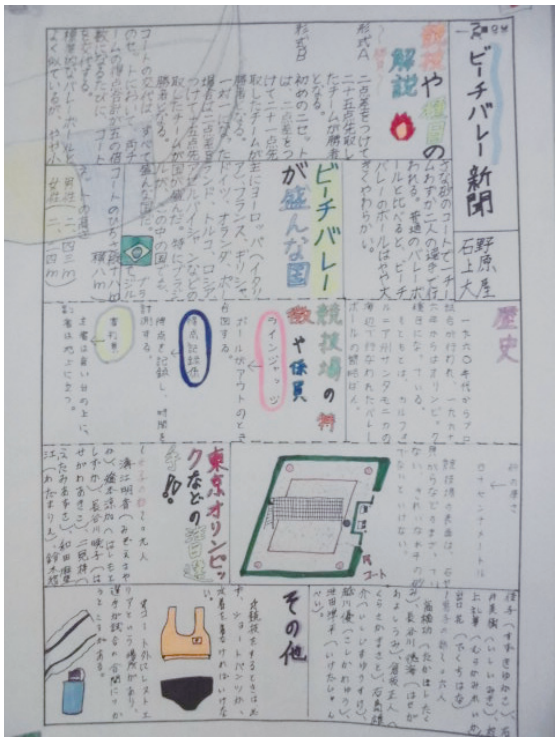
6 取組内容

・活動内容
　図書館やインターネット等を利用して調べ学習を行い、新聞にまとめる。
・授業の進め方
　①保健体育（2 時間）
　　運動やスポーツの必要性と楽しさ、オリンピック、パラリンピックに対する関わり方を知る。
　②総合的な学習の時間（1 時間）
　　学習内容の説明。調べ学習用の班分けと担当競技、種目の決定。
　③保健体育（2 時間）、総合的な学習の時間（2 時間）
　　各担当競技、種目の調べ学習。新聞まとめ。
　④総合的な学習の時間（1 時間）
　　発表会

・対象
　１年生　各クラス男子５班、女子５班

＜調べる内容例＞
①競技、種目の解説
②競技場の特徴や係員、ボランティアの仕事など
③競技人口や盛んな国
④競技の歴史（過去の試合結果など）
⑤ 2020 年東京大会注目選手、チーム（海外選手や国内選手）について
⑥ 2020 年東京大会に向けた、その競技や種目の課題について
※新聞を生徒玄関に掲示し、周知する。





7 成果

(1) 体育理論の授業内容と関連させて進めることで、調べ学習をスムーズに行うことができ、細かい内容までまとめることができた。また、その競技についての理解を深めることができた。
(2) 当初はオリンピック、パラリンピックへの関わり方について訪ねたところ、「応援すること」という意見がほとんどであったが、今回の取組後は、「ボランティアをする」「施設や環境の整備をする」「外国人をもてなす」などの多様な意見が見られるようになった。

8 課題

(1) 今回は生徒数と、実施競技種目数のバランスをとることができたが、学校規模によっては、調べる種目の精選が必要であると考える。
(2) 今年度は、年度途中からの実施になったため、実施時期の調整や時間の確保に苦慮した。

実践事例６　岐阜県立関高等学校（岐阜県）

① 取組、活動名

英語で学ぶ女子柔道とオリンピックの歴史

② 実施対象者

第１学年　279 名

③ 展開の形式

教科名：コミュニケーション英語Ⅰ

④ 目的、ねらい

○女子柔道の母と呼ばれる米国人女性の生涯について、聞くこと、読むことによって理解し、スポーツおよび男女差別について学ぶ。女性であることを理由に男性と同じように柔道をすることを拒まれた女性が地道に活動を続けた結果、女子柔道はオリンピック競技の一つになったという実話から、実現困難な夢をかなえようとする際にどのような姿勢・行動が求められるのかを考える。

⑤ 工夫

○日本におけるオリンピック競技の変遷や、あり方だけでなく、スポーツ界に見られる男女差別、人種差別などの現状について、生徒たちに学ばせることができた。
○ワークシート等の中に Rena Kanokogi の場面ごとの心情を考えさせる問を増やし、差別される側の気持ちに迫らせた。
○授業の導入の中で女子柔道だけでなく男子シンクロや女子野球などにも触れ、スポーツにおけるジェンダーやマイノリティについて考えさせた。

⑥ 取組内容

「オリンピック」を題材としたコミュニケーション英語Ⅰの授業実践
○スポーツに対する情熱、夢の実現、男女差別について考える題材。
○柔道に魅せられた米国人女性柔道家 Rena Kanokogi が女子柔道の地位向上のために努力し、女子柔道をオリンピック競技にしたという実話であり、この題材で考えさせたことは次の３点である。
(1) 困難な日常生活の中で、簡単にあきらめてしまっていることはないか。

(2) スポーツ界における gender equality の現状と問題点。
(3) スポーツの世界に限らず、Social Justice を追い求めるために、私達には何ができるか。
○教科書の読み取りに加えて、いくつかの short film などを生徒に提示することで、authentic な英語に触れる機会を与え、様々なものの見方ができることを示すことができた。

7 成果

○今ではオリンピックの競技として当たり前に認知されている女子柔道が、ここに至るまでには、多くの人々の努力と長い時間がかかっていることを知ることで、よりオリンピックに興味・関心をもつことができた。
○女子柔道と五輪の歴史的変遷だけでなく、スポーツにおけるジェンダーやマイノリティの問題についても考えることができた。
○固定概念や慣習の中に差別が含まれており、何事においても人の気持ちや立場に立って考えることの重要性を学ぶことができた。それに関連して、五輪憲章には五輪組織がいかなる形の差別とも相入れないことが書かれてあり、五輪が崇高な理想を目指す大会であることを理解することができた。

8 課題

○学んだことについて、自分を見つめなおし、自己表現をさせるという活動が十分にとれなかった。
○アンケートなどをとって、学びの前・後の状態（生徒の意識調査）を把握することができなかった。
○生徒にとっては馴染のない選手の話であり、なかなか 2020 年東京大会への意識づけまで持っていけなかった。むしろ男女差別や偏見といった情緒的な部分へのアプローチにはなった。

実践事例７　伊豆の国市立大仁中学校（静岡県）

① 取組、活動名

諸外国のパラリンピアンとの国際交流

② 実施対象者

第１学年　144 名

③ 展開の形式

教科名：総合的な学習の時間

④ 目的、ねらい

世界中の注目を集め、さらに身近な場所でも競技が行われる 2020 年東京大会は、生徒にとって大変貴重な機会となる。オリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関して学ぶことで、さらにオリンピック、パラリンピックを身近に感じ、スポーツを通して心と体をきたえ、世界中の人と交流して平和な世界を築いていこうとする精神を育成する。

また、オリンピアンやパラリンピアンと交流をしたり、映像を見たりすることにより、自らの夢に向けて何事にも挑戦する意欲を高めるとともに、失敗してもあきらめない強い意志を育てる。

⑤ 工夫

平成 29・30 年度と国立教育政策研修所教育課程研究センター関係指定事業を受け、道徳教育の推進に努めている。そこで、オリンピック･パラリンピックムーブメントの目的と本校の学校教育目標「夢を拓く」の三本柱を軸として計画を立て、１時間ごとを意図的に活動できるようにした。

また、体験的な学びの機会を設けたり、自分なりに課題を発見し解決する活動を取り入れたりすることで、主体的で深い学びとなるようにした。

⑥ 取組内容

(1) 事前学習（3 時間）
　〇基礎的知識の理解として、オリンピック、パラリンピック憲章、歴史、競技種目、出場選手、参加国などについて、DVD を利用して意義や歴史を学ぶ。
(2) パラリンピアンとの交流（川本翔太氏：パラサイクリング、2 時間）
　〇パラリンピアンとの交流を通して、目標を持ち、努力することの大切さに改めて気付くとともに、自分に置き換えて考え、これからの生き方を見つめ直す機会とする。
(3) パラリンピックの競技体験（5 時間）
　〇ブラインドサッカー、シッティングバレー、ゴールボール、障がい者陸上の体験を通して、違いを肯定し、自然に受け入れ、助け合える態度を育成する。

(4) 振り返り（3時間）
○これまでの学習・体験を振り返り、これからの生き方や2020年東京大会への関わり方について考えをまとめる。
(5) 諸外国のパラリンピアンとの国際交流（2時間）
○パラリンピアンの競技を観戦し、その姿勢を肌で感じることにより、これまで以上に関心を深める。また、ドイツやポーランドなど5カ国の代表選手と英語で質問をしたり日本文化の紹介をしたりすることにより、国際的な視点を身に付ける。



事前に作成した応援用の横断幕


ドイツの選手との交流


ポーランドの選手との交流


チェコの選手にサインをもらう生徒

7 成果

パラリンピアンと交流をしたり、映像を見たりする活動の振り返りでは、「私も向上心をもって取り組みたいです。」や「自分も逃げずに、自分に厳しくしていきたいです。」など、夢に向かって努力をする態度や困難を乗り越えやり続ける意欲の高まりが見られた。また、ドイツやポーランドなどの選手とのふれ合いを通して、国際的な視野に立って日本やオリンピック、パラリンピックについて考えることができた。

まとめの活動では、「オリンピックの歴史をもっと知りたい。」「オリンピック、パラリンピックを支援するために自分ができることは何だろう。」や「この大会を通して伊豆の国市の良さを伝えるにはどうしたらいいのだろうか。」など、全員の生徒が自分の課題を設定し、「伊豆の国市に点字ブロックを増やしたい。そのために募金活動をしたい。」など、自分の考えを画用紙にまとめることができた。また、文章からは、実際にブラインドサッカーやゴールボールを行ったから分かる不自由さや、その理解からくる障がい者との共生についての思いが読み取れた。

オリンピック・パラリンピック学習を通して「オリンピック、パラリンピックに興味があるか。」という質問をしたところ、「ある。」と答えた生徒は、事前47%、事後60%となった。また、「全くない。」と答えた生徒は、事前5%、事後1%となった。また、「もっと知りたいですか。」という事後に行った質問に対しては、89%の生徒が「もっと知りたい、もう少し知りたい。」と答えた。このことから、生徒たちは2020年東京大会に主体的に関わっていくことが予想される。

8 課題

現役のオリンピアン、パラリンピアンの講師の確保が最大の課題だと考えられる。2020年東京大会が近づくにつれ、練習や大会等で忙しくなるとおっしゃられていたので、今後は本年度以上に確保が難しくなると考えられる。また、生徒たちの表情から全体での講話より小集団で会話・質問をしたり、競技体験をしたりする時間の方が、教育効果が高いと感じられた。そのような要望に応じて頂ける講師の方が少ないことも課題であると考えられる。

実践事例８　兵庫県立社高等学校（兵庫県）

① 取組、活動名

オリンピックに関する研究発表会

② 実施対象者

生徒 710 名、保護者 6 名、学校評議員 5 名、
地域住民 50 名、中学生 30 名

③ 展開の形式

教科名：体育理論、学校行事

④ 目的、ねらい

「オリンピックの機運を高めるために我々ができることは何か」をテーマに、本校生徒を対象にオリンピックへの興味関心を高める要素について考察する。その成果を課題研究発表会で発表することで、学校外の方々のオリンピックへの興味関心を高めることに繋げる。

⑤ 工夫

○アンケート等を実施し分析したデータを発表で用いた。
○トップアスリートや指導者の講演会と事前指導・事後指導を有機的に関連付ける。講演会でオリンピックに対する生徒の考え方に変容が見られ、研究の方向性も明確となった。

⑥ 取組内容

第 1 回「オリンピックを知る」
　オリンピックの歴史、日本選手団のメダル獲得数（全大会）、日本選手団のメダル獲得率（種目別）、視聴率調査（前大会）、各種目の認知度等、グループでまとめ発表を行う。

第 2 回　講演「2020 年東京オリンピックに向けての取組」
　講師：日本陸上競技連盟専務理事 尾縣 貢

第 3.4 回「オリンピックに参加する」意識を広めるには？
　「オリンピックに参加する」という視点を付け加え、第 1 回の各グループのまとめを再考察

第５回　体育科課題研究発表会で発表を実施



第６回　３学科課題研究発表会

○地元の商業施設において、本校の３学科合同発表会おいて成果を発表する。

7 成果

○発表者の感想

　長い時間をかけて、調査や研究をしてきたが、最も大切なことは、自身が出場したとしても、誰のために戦うのか、努力するのかということが重要であり、その思いが多くの人たちに感動を与え、それが応援となって再び自分に返ってくるものだと感じた。機運を高めるということは、多くのアスリートを助けることにつながり、それが国を愛し、助けることに繋がるという事もよく理解できた。

○参加者の感想

　社高校体育科が行っているオリパラムーブメントの発表を見た。一見当たり前のようなことでも、多くの選手や関係者を助けることで繋がることがわかった。オリンピックと言えば、ただ見て感動したり、興奮したりするもののように感じていたが、その思いが多くの人に関わっていくことになり、その気持ちを伝えていくことをしていかないといけないと感じた。高校生でもそう思えるなら、大人の私たちももっと関わっていくべきだと感じた。

8 課題

○内容がオリンピックに偏ってしまい、パラリンピックについて扱うことができなかった。

○オリンピックについての研究という頭だしではテーマが大きすぎたため、資料検索するまでに時間がかかってしまった。最初にテーマの絞り込みをさせる必要があった。

○発表対象者を明確にしておく必要がある。

実践事例９　高知県立高知丸の内高等学校（高知県）

① 取組、活動名

パラリンピアンの講演及び実技体験を通したオリンピック、パラリンピックの理解

② 実施対象者

事前学習・事後学習：第１学年　166 名
講演・実技体験：全校生徒 496 名　教職員 30 名

③ 展開の形式

教科名：保健体育
行事名：講演（学校行事）

④ 目的、ねらい

オリンピック、パラリンピックを通じて「スポーツの価値や効果」、「障がい者スポーツ」、「郷土や外国の文化」などに関する学びの機会を提供し、県民のスポーツに対する理解を深め、大会後も県民が主体的、積極的にスポーツ活動に参画する持続可能なスポーツ環境づくりにつなげるとともに、オリンピック、パラリンピックへの県民の意識を高め、2020 年東京大会に多くの県民が主体的に取り組む機運の醸成を図る。

⑤ 工夫

地域セミナーで紹介のあった、I'm POSSIBLE を活用して、事前学習、事後学習の内容を検討した。時間数に限りがあるため、ワークシートを作成し授業の中で活用した。

⑥ 取組内容

(1) 事前学習
　オリンピズム。オリンピズムの歴史。国際オリンピック委員会の活動。東京大会に出場が期待される県内選手等。
(2) 講演・実技体験
　講師：池　透暢氏（日興アセットマネジメント）
　　リオデジャネイロパラリンピック

ウェルチェアーラグビー日本代表キャプテン
銅メダリスト
演題：「挑戦することの大切さとスポーツの魅力」

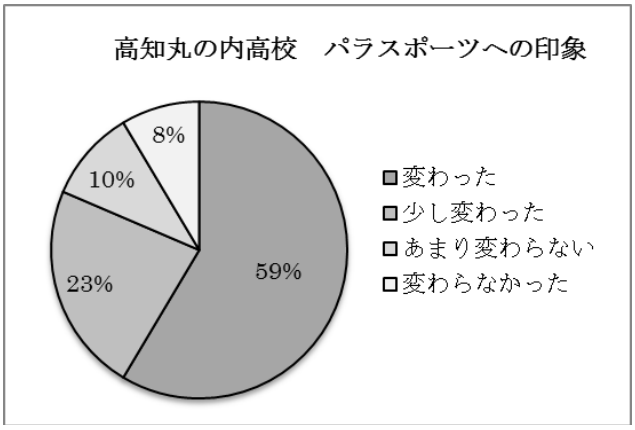
(3) 事後学習
事前学習、講演の振り返り。パラリンピックとは。スポーツの魅力等。





7 成果

アンケート結果



○つらい過去もあるし、つらい現実もある。それを諦めずに乗り越え生きる理由に変換できることを、私は素直に尊敬しました。
○いつもオリンピックの方ばかりに注目していたけど、パラリンピックにも注目すべきだったなと思いました。パラリンピックや障がい者スポーツがとても身近なものに感じました。
○努力を重ねてこそ得たものに価値があるというのを聞いて、コツコツと努力し、挑戦することを恐れず夢をつかみ取りたいです。

8 課題

全校生徒が講演を聴くことができたが、授業は時間割の都合上、1 年生次生のみの実施となった。

オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料や I'm POSSIBLE を活用し、継続した授業確保が効果的であると考える。

実践事例 10　札幌市立信濃小学校（札幌市）

1 取組、活動名

「札幌オリンピックミュージアム」を活用したオリンピック・パラリンピック教育

2 実施対象者

第３学年　102 名

3 展開の形式

教科名：社会、総合的な学習の時間

4 目的、ねらい

○札幌市の公共施設の一つである「札幌オリンピックミュージアム」を見学し、その働きについて理解するとともに、冬のスポーツについて興味・関心を高める。

5 工夫

○社会科の「市の様子」の単元の公共施設の働きと関連付けて、実際に「札幌オリンピックミュージアム」に行くことで、児童の興味・関心を高めた。

6 取組内容

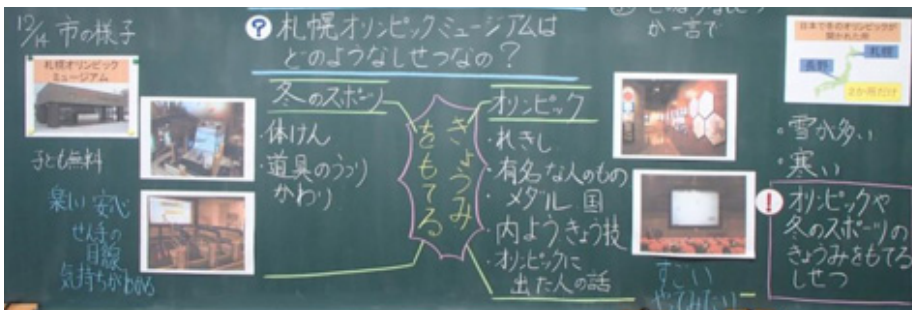
(1) 社会科の授業

単元「市の様子」（全７時間）において、公共施設の働きについて教室で学習する。

事前学習の板書

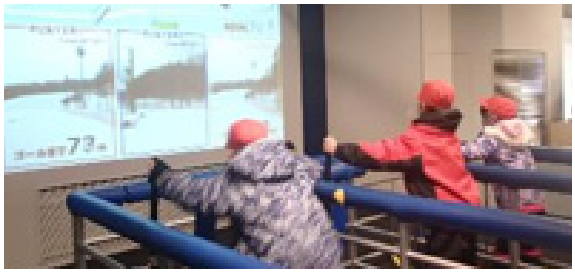
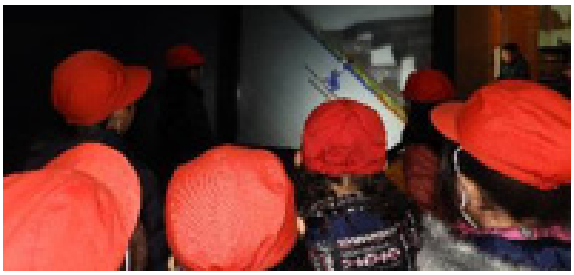
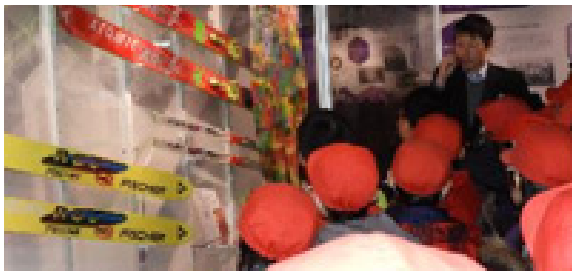


事後学習の板書



(2)「札幌オリンピックミュージアム」の観覧とオリンピアンの講演
　単元の４時間目に身近な公共施設の１つとして、「札幌オリンピックミュージアム」に行き、オリンピックのすごさや冬のスポーツの楽しさを伝える施設だということを理解させる。その際、オリンピアンの講演も施設内で実施し、オリンピックや冬季スポーツについての理解をより深める。
(3) 社会科の授業
　「札幌オリンピックミュージアム」を観覧して、感じたこと、考えたことをまとめ、公共施設の働きについて理解を深める。

見学の様子

7 成果

(1)　３年生なので話を聞くだけではなく、スキージャンプやクロスカントリーなど、実際に疑似体験して学べるコーナーがあったので、施設を利用することで、楽しみながら学習することができた。また、冬のスポーツへの興味・関心をもつことができた。
(2) 札幌オリンピックニュージアムに見学に行くことで、どのような施設なのかを具体的に理解することができたので、まとめる際にも児童の実感を伴った意見がたくさん出てきた。
(3) オリンピックに出場した人による努力の大切さや諦めない心などの道徳的な話は、実感が伴っており、児童も真剣に話を聞いていた。
(4) 冬のスポーツについてもルールが書いてあったり道具が置いてあったりして、調べやすかった。

8 課題

(1) 社会の「市の様子」と関連付けるならば、１学期の単元なので、１学期中に行けるようになるとよりよい。
(2) 人数が多く時間も短かったので、全員が体験コーナーを十分に取り組むことができなかった。
(3) 事前にオリンピックミュージアムの方に学習内容を伝えて、プログラムを調整できると、児童がよりスムーズに学習につなげられると感じた。
(4) 解説などは、文章表記や漢字などが３年生には少し難しかった。

実践事例 11　札幌市立澄川小学校（札幌市）

1 取組、活動名

「札幌オリンピックミュージアム」を活用したオリンピック・パラリンピック教育

2 実施対象者

第３～４学年　164 名

3 展開の形式

教科名：道徳、特別活動

4 目的、ねらい

○冬のスポーツに触れ、その良さをまとめ、発表し合うことで、成就感や達成感を味わうとともに自己の成長を振り返り、自己を伸ばそうとする意欲をもてるようにする。

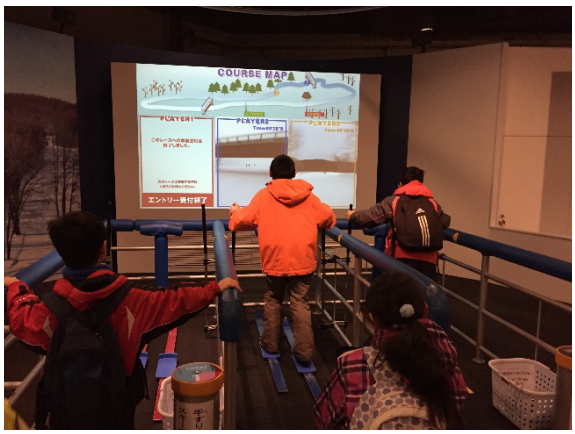
5 工夫

○「札幌オリンピックミュージアム」では、札幌オリンピックにおいて選手が使った用具などの歴史ある物に触れたり、冬のスポーツのシミュレーションを行える体験型の施設を活用した活動を行った。

6 取組内容

(1) パラリンピアンの講演
　永瀬充（アイススレッジホッケー）氏の講演を聴き、障害に対する理解を深めるとともに、冬のスポーツに対する興味関心を高める。
(2)「札幌オリンピックミュージアム」及び「大倉山ジャンプ競技場」の観覧
　「札幌オリンピックミュージアム」内の施設を探索し、冬のスポーツに対する理解を深める。





7 成果

(1) スキーのジャンプ台の高さを実感的に学ぶことで、ジャンプ選手のすごさを知り、憧れをもつことができた。
(2) あきらめずに努力し続けることで夢をつかんだお話を聞いて、尊敬のする気持ちをもつことができた。
(3) 冬のスポーツに親しみ、関心を広げることができた。

8 課題

(1) 札幌市の全小学校で取り組むことを考えると、札幌市の教育課程編成の手引に位置付けるとよい。
(2) 館内の待機スペースが狭く感じた。人数を減らすなど工夫が必要。
(3) 施設内を 100 人で見学すると全て体験できない児童がでてきた。体験できる施設を増やすとよい。
(4) この体験と学校での現地学習などを組み合わせて行うことができるよう計画できるとよい。

実践事例 12　千葉市立蘇我中学校（千葉市）

1 取組、活動名

体育理論の実践を通したパラリンピックの理解

2 実施対象者

生徒 154 名

3 展開の形式

教科名：保健体育

4 目的、ねらい

モデル校での実践等を通して、体育・保健体育の学習を充実させ、生徒が、よりスポーツを好きになり、生涯にわたって運動に親しむ資質を育むこと、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図ることを目的とする。

5 工夫

(1) オリンピック、パラリンピックをテーマにしたブックトーク

授業実践の前に、図書委員会や図書館指導員がブックトーク（本の紹介）を行った。ブックトークは図書委員会の活動として年に 2 回朝読書の時間に行っている。今年はオリンピック、パラリンピックをテーマとして発表した。



(2) シッティングバレーボールの授業実践

大学の先生を講師として招聘し、第 3 学年男子でシッティングバレーボールの授業を行った。まず始めに、この運動の特性を説明し、準備運動、練習、そしてゲームまで体験させることとした。第 3 学年女子は体育理論の授業後、バレーボールの最後の 2 時間でシッティングバレーを行った。理論を学習したあとに実践することで、興味・関心がより高まり、パラスポーツが身近に感じられるようになった。



(3) オリパラ関係の掲示物

日々の学校生活の中で生徒の目に触れや



すい廊下や階段の踊り場に、オリパラのシンボルマークや千葉市開催の種目の紹介等を生徒中心に作成し、掲示した。さらに１階廊下の幟旗や廊下の掲示物は、来校された保護者、地域の方々にも触れていただく機会となった。

6 取組内容

〔体育理論（全３時間)〕
(1) 現代社会におけるスポーツの文化的意義（1/3)
○自分にとってスポーツとは何かを考え、書き出す。スポーツにはどのようなものがあるか発表で挙げ､目的によって「競技スポーツ」「レクリエーション」｢体つくり･健康つくり」｢野外活動」などがあることを知る。スポーツの良さや魅力について考え、ホワイトボードでグループ発表する。スポーツ憲章、スポーツ基本法について学ぶ。
(2) 国際的なスポーツ大会とその役割（2/3)
○リオパラリンピックダイジェストの映像を見て、パラリンピッククイズを考える。
○国際大会の役割、オリンピズム、パラリンピックの理念を学ぶ。どんな人たちがオリンピック、パラリンピックに関わっているかをできる限り多く付箋に書き出し、グループで共有する。
(3) 人々を結びつけるスポーツ（3/3)
○前時で学習した人々や職業を３つに分類すると、どのような分け方になるかを考えて発表する。
○「する」「見る」「支える」に分類し、気が付いたことを書く。
○ 2020 年東京大会に自分がどのように関わったり支えたりすることができるかを考え、ホワイトボードを活用して発表する。

7 成果

○生徒は、授業実践前はスポーツやオリンピックというとアスリートや選手が関係するものであるというイメージが強かった。授業後の感想から、支えるという関わりもあることに気が付き、スポーツに対する価値観が広がった。
○パラリンピックについて学ぶことで、多様性や共生社会の意識を少しでも身につけることができた。
○千葉市でも開催される 2020 年東京大会への興味・関心が向上した。

8 課題

○１時間目の授業の内容が多く、時間内に収まらなかった。時間の配分をもう少し短縮したり、内容を精選して流れに工夫を加え、時間配分を考えたりする必要があると感じた。
○総合での扱いや他教科と連携することで興味・関心がさらに深まるだろうと考える。そのためにも、全職員がオリパラについて研修して協力体制を整え、計画的、継続的な取り組みが必要である。

実践事例 13　北九州市小森江東小学校（北九州市）

1 取組、活動名

新聞記者による講演及びはがき新聞の作成

2 実施対象者

第４～６学年　全クラス 52 名

3 展開の形式

教科名：総合的な学習の時間、国語

4 目的、ねらい

○ 2020 年東京大会に向けて、新聞記者から直接に報道の在り方を聞き、オリパラやスポーツについて興味・関心を高める。
○ 2020 年東京大会に出場する選手たちを応援しようとする心情を育てる。

5 工夫

オリンピック、パラリンピックについて、新聞の役割や新聞記者の目からみた競技について、児童に分かりやすく話していただいた。

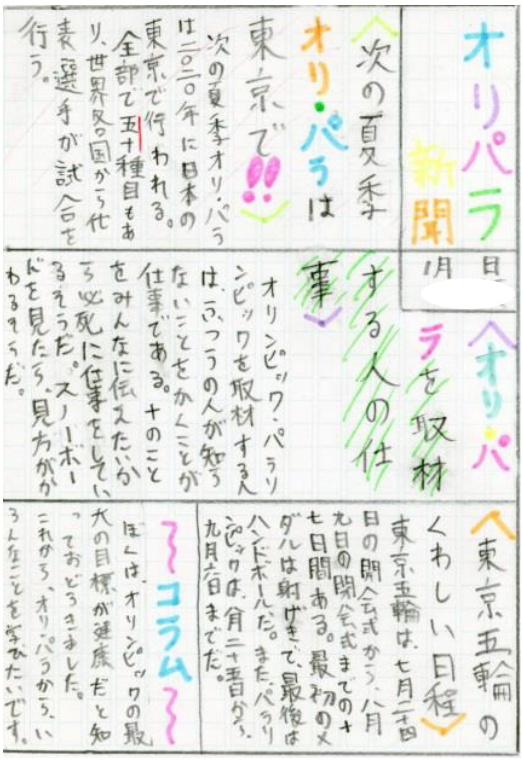
6 取組内容

西日本新聞社の運動部の記者から 2020 年東京大会の報道の在り方（五輪に期待することやどのように新聞社が報道するか）を出前授業の講師として迎え、講演していただいた。

1996 年アトランタ大会報道の経験がある講師の手島基氏は、選手の活躍の裏にある涙や汗、努力をインタビューした上で、取材して伝えていることを児童に語った。さらにマスコット投票についても触れ、なぜこのような取組をしているのかも語った。



6年生は、後日、はがき新聞作り（はがきの大きさに新聞形式でまとめたもの）に取り組んだ。



7 成果

オリンピック報道の新聞記者から直接話を聞くことで、オリンピック、パラリンピックに対する興味・関心が高まった。

2018年平昌大会、2020年東京大会を観るのか楽しみだと思う児童が増えた。

8 課題

○オリンピック、パラリンピックの競技をいろいろ体験させたかったが、道具や安全面でできない。
○オリンピック、パラリンピックに関する新聞記事や資料等を児童に触れさせたり読ませたりしたいが、費用がない。

実践事例１　水戸市立緑岡中学校（茨城県）

① 取組、活動名

おもてなし講座と地域のマラソン大会へのボランティア参加

② 実施対象者

全校生徒 500 名　教職員 35 名

③ 展開の形式

教科名：学級活動
行事名：オリパラ事業講演会
イベント名：水戸黄門漫遊マラソン、水戸梅まつり

④ 目的、ねらい

オリンピック、パラリンピック開催の機運を生かし、生徒のオリンピック精神やおもてなし精神の醸成を図ることで、他者を思いやる心を育てる。

⑤ 工夫

講演会前に江上先生の著書を用意し事前指導を行い、事後においても、振り返りや話し合いを行うことで、単に講演会を聞くだけでなく、考えたり振り返ったりする場面を増やし，生徒の心を揺さぶるようにした。

⑥ 取組内容

(1) 講演会の実施
日時：平成 29 年 10 月 5 日（木）
①筑波大学客員教授 江上いずみ先生を講師としてお迎えし「グローバルマナーとおもてなしの心」の演題で全校生徒を対象に講演会を実施した。
②事後指導として、学級活動において講演会後の振り返りを行った。



(2) 水戸黄門漫遊マラソンボランティア
日時：平成 29 年 10 月 29 日（日）
①エイドステーションの運営
②ランナーへの声援
③コースの清掃



(3) 水戸観梅まつり
日時：平成 30 年 2 月 25 日（日）
①偕楽園でのお出迎え
②チラシ配布
③記念写真補助

7 成果

(1) 講演会後の生徒のボランティアに対する意識の変容が大きく、相手を思いやる気持ちが普段の行動においても前面に出るようになった。
(2) 相手を気遣う心遣いが所作にも表れるようになり、分離礼などを意識するようになった。
(3) マラソンボランティアは、あいにくの土砂降りの中であったが、最後までさわやかな笑顔を絶やすことなく献身的に取り組んでいた。
(4) 単に給水を行うだけでなく、声をからしランナーを声援し続けるなど、心から相手を思う行動が参加した全生徒にみることができた。

8 課題

(1) ボランティアの精神や相手を思いやる気持ちは育ってきているが、オリパラに対して今後どう関わっていくことができるかが、具体的に見えてこない。
(2) オリパラ事業の啓発パンフレットや資料などが身近にあると、継続的に意識付けが図れるのではないか。

実践事例２　流山市立小山小学校（千葉県）

① 取組、活動名

地域のロードレース大会へのボランティア参加

② 実施対象者

全校生徒 975 名

③ 展開の形式

行事名：地域における活動
イベント名：流山市ロードレース大会

④ 目的、ねらい

ボランティアの意義について知り、また、参加しようという意識を向上させる。

⑤ 工夫

「流山市ロードレース大会ボランティアスタッフ」参加では、小学生児童として取り組めるボランティアの仕事について主催者と打ち合わせを行った。また、日曜日であったこともあり、事前に参加の趣旨とボランティア内容や当日の詳細について保護者への説明や理解を得た上で希望者が参加できるようにした。また、こうした大会は本当にいろいろな面から、多くの人達の手によって成り立っていることを実感できた。

⑥ 取組内容

流山市ロードレース大会ボランティアスタッフ
「おもてなしプロジェクト」の一つとして、「第 26 回流山市ロードレース大会」へのボランティア参加を行った。当日は、5・6 年生の有志 34 名が参加し、「給水所」にて水やバナナなどの軽食を渡したり道路にて紙コップを回収したりした。また、小山小学校の児童がボランティアスタッフとして参加していることが一目でわかるように「with Team Oyama」というキャップを作り、当日はかぶって参加した。







7 成果

「流山市ロードレース大会ボランティアスタッフ」に参加した児童達は、「ありがとう」や「えらいね」など感謝の言葉をいただけたことで、温かさを感じることができた。ボランティアを初めて経験する児童がほとんどであったが、「来年度も参加したい」「他でも機会があればボランティアに参加したい」という思いを持つことができた。

8 課題

「流山市ロードレース大会ボランティアスタッフ」参加では、主催者との調整などに時間を費やすことになってしまい、保護者への説明や連絡が遅くなってしまった。また、引率職員へも休日にお願いすることになってしまった。

実践事例３　松戸市立小金中学校（千葉県）

① 取組、活動名

ドミニカ共和国との交流会

② 実施対象者

全学年 38 名（応募による）

③ 展開の形式

行事名：ドミニカ共和国との交流会

④ 目的、ねらい

2020 年東京大会において、松戸市でキャンプ実施予定の、松戸市に在住するドミニカ共和国の人と交流を持つことで、3 年後に彼らが来日した折に、生徒が積極的にコミュニケーションをとろうとする態度を育てる。

⑤ 工夫

(1) 外国人とのふれあい
　体験型の講座とするために少人数とし、教室で行い外国人講師と生徒との距離を近づけた。
(2) 食文化体験
　生徒の意欲を高めるために、講師の方とともにドミニカ共和国の特徴的な料理を作ったり、試食したりして交流を一層深めたこと。

⑥ 取組内容

(1) ドミニカ共和国の人を講師として、言語、文化・慣習等についての交流を図る
①言語の理解（スペイン語）
　普段ほとんど触れることがない言語を体験することで、英語とは一味異なる言語の楽しさを味わった。
②文化・慣習の理解
　特産品や民族衣装、伝統工芸品などの実物を紹介していただき、生徒はドミニカ共和国という国にとても興味を持った。
③食文化について

鶏肉のトマトソース煮、ドミニカ風お赤飯を作成した。パクチーを使ったエスニカン風味は、生徒の関心を引いた。調理の際には、スペイン語と英語と日本語をミックスして、ドミニカの人を身近に感じながら楽しく実習が進んだ。







7 成果

オリンピック、パラリンピックを活用することで、松戸市を訪れる外国の人を想定した授業展開ができる。

8 課題

言葉の問題から事前の打合せや準備などを松戸市観光協会のスペイン語が分かる方を仲介してドミニカ共和国と行っていたため、メールでのやり取りが中心となり、時間がかかったこと。

実践事例４　岐阜県立岐阜盲学校（岐阜県）

1 取組、活動名

文化祭を活用したパラリンピック教育

2 実施対象者

生徒 13 名

3 展開の形式

行事名：文化祭

4 目的、ねらい

○来校された方にサウンドテーブルテニスやボーリングを楽しんでもらうことで視覚障がいについての理解啓発を深める。また、共に活動をすることで、相互理解に繋げていきたい。

5 工夫

○文化祭には地域の方や、近隣の高校生が多数来校されることもあるため、当校で実施している視覚障がい者スポーツの紹介を部活動紹介の中に入れて発表する場とした。

6 取組内容

○事前の取組
生徒全員が、来校者の立場になって体験を行い、楽しんで活動をしてもらうための工夫を考えて意見を出し合うことにした。

○フレンドパーク
近隣の高校生にボランティアとして参加してもらい、一緒に来校者の対応を行った。サウンドテーブルテニスでは、ルールを説明する人、対戦相手になる人、試合を進行する人に役割を分担して活動した。体験をする人が、アイマスクを着用した際には、当校生徒が自主的にエスコートする場面もみられ、それをきっかけに話が弾むきっかけにも繋がっていった。ボーリングでは、投げる人がアイマスクを着用しているため、音を鳴らして目標となるピンの場所を知らせることにした。音を頼りに投げることの難しさを体験した。





7 成果

○当校の普通科の生徒数は 13 名と少人数である。また、同年代である他校の高校生と交流する機会も少ない。今回、ボランティアの高校生と一緒に、来校者に楽しんでもらおうと活動したことで、助け合う姿もみられた。文化祭終了後には、ボランティアの高校生に感謝の気持ちをメッセージに書いて渡したいと提案があり、感謝の気持ちを伝えることができた。

8 課題

○生徒たちは視覚に障がいがあることで、支援を受ける機会が多い。そのため、主体的に活動する経験や自分たちでやり遂げたといった達成感がもちにくいこともある。今回のように、来校者の方に楽しみ、喜んでもらえた経験や同年代の仲間と一緒に活動する体験を通して、成就感や達成感がもてるようにしていきたい。また、ボランティアの高校生に対しては、当校の生徒が役割としてお願いしたいことを、相手に具体的に伝えて相互に理解し合うことができる場にしていきたい。

実践事例５　岐阜県立岐阜聾学校（岐阜県）

① 取組、活動名

地域のボランティア活動を通したボランティア精神の育成

② 実施対象者

生徒 13 名（高等部 10 名、中学部 3 名）

③ 展開の形式

行事名：「地域クリーン作戦」

④ 目的、ねらい

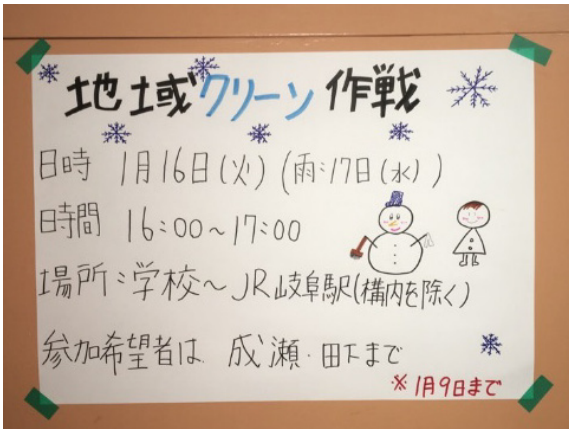
○いつも見守ってくれる地域の人たちへ、感謝の気持ちを込めて清掃活動を行う。
○ボランティア活動を通して、奉仕の精神を育み、地域とのつながりを深める。

⑤ 工夫

○生徒会役員を中心とした取組として、生徒主体で活動を計画できるように、担当教員はできるだけ、話し合い等を見守るようにした。

⑥ 取組内容

(1) 事前学習
○生徒会役員を中心に『地域クリーン作戦』の実施計画を検討、立案する。
○校内に参加者募集のポスターを掲示する。また、部集会にて、参加を呼びかける。



(2) 学校から JR 岐阜駅までの通学路の清掃活動を実施






7 成果

○通学路の清掃活動を通して、ボランティア活動の素晴らしさや地域とのつながりに気付くことができた。
○参加した生徒の感想より
『タバコの吸い殻が多く、タバコのポイ捨てする人が多いことが分かりました。終了後の帰り道では、歩道がキレイになっていて、気持ちが良かったです。また、参加したいです。』
『地域の人たちへ感謝の気持ちを込めて、学校から JR 岐阜駅までの通学路の清掃活動をしました。意外とゴミがたくさんあり、びっくりしました。また出来たらいいなと思いました。』
『初めて参加しました。想像以上にゴミは少なく感じました。キレイで気持ち良く過ごせるように、日頃から地域の方々が、掃除してくれていることに気付きました。』

上記のことから、2020 年東京大会を「支える」という役割や、「マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成」につながる活動に取り組めた。

8 課題

○時期的なこともあり、参加者が少ないこと。また、日没時間が短いため、活動時間が限られること。
○通学路の清掃活動のため、交通事故防止に細心の注意が必要であること。

実践事例６　糸島市立前原東中学校（福岡県）

1 取組、活動名

都市鉱山からつくるみんなのメダルプロジェクトへの参画

2 実施対象者

全校生徒 716 名

3 展開の形式

教科名：道徳
その他：生徒会活動

4 目的、ねらい

2020 年東京大会開催に向けて
○スポーツの意義や価値について関心を高めるとともに理解できる生徒の育成
○スポーツに主体的に参画（する・みる・支える・調べる・作る）する生徒の育成
○他者と協働し主体的に取り組む態度、多様性の尊重、公徳性を身に付けた生徒の育成

5 工夫

○単発の取組にするのではなく、複数の取組の関連を図った。
○生徒の主体性、自主性を尊重するように配慮した。
○これまであった既存の行事等にオリンピック、パラリンピックの要素を取り入れていった。

6 取組内容

○全校学習会（道徳）
日時：平成 29 年 10 月 16 日（月）６校時
場所：体育館
内容：オリンピック、パラリンピックに関する知識
（歴史・競技種目・精神等）
大会を支える仕組み

スポーツの価値（努力を尊ぶ態度・フェアプレイ精神等）
選手の体験やエピソード
参加国、地域文化や言語や我が国の伝統や文化
「都市鉱山からつくるみんなのメダルプロジェクト」説明



○都市鉱山からつくるみんなのメダルプロジェクト
小型家電の回収
期間：第一次　平成 29 年 10 月 17 日（火）～ 11 月 11 日（土）
　　第二次　平成 29 年 11 月 20 日（月）～ 12 月 20 日（水）
回収品目：使えなくなった小型家電（携帯・ゲーム機・電卓・デジカメ等）
回収方法：生徒会作成の募集要項を全校生徒と地域（公民館）に配付
前原東中玄関前に美術部作成のポスターと科学技術部作成の回収ボックスを設置
糸島市役所回収（生活課）

○福岡マラソンでの PR
日　時：平成 29 年 11 月 12 日（日）
場　所：ゴール地点（志摩中央公園東中ブース）
参加者：生徒会役員 やるキッズ（自主的ボランティア）募集 美術部員 教員数名
内　容：「都市鉱山からつくるみんなのメダルプロジェクト」説明
前原東中が取り組んできたボランティア活動の報告と掲示



7 成果

○生徒会主導でメダルプロジェクト等の企画・運営を行ったことで、オリンピック、パラリンピックに主体的に取り組んでいこうとする。
○複数の取組を意図的・計画的に行い、関連させていくことでそれぞれの取組の内容を充実させることができた。

8 課題

全校での取組が主となってしまったため、学級単位等での実践について検討していく必要がある。

実践事例 1　盛岡市立上田中学校（岩手県）

1 取組、活動名

パラスポーツを通した通常学級と特別支援学級の交流

2 実施対象者

139 名（第 1 学年 118 名、特別支援学級 21 名）

3 展開の形式

教科名：保健体育

4 目的、ねらい

○同じ学校で生活する特別支援学級の生徒と通常学級の生徒とが、パラリンピアンからの講話及び授業（体験活動）で共に学んだことをきっかけに、これまで以上に互いを理解し、交流を深めていく一助とする。

5 工夫

○事前学習を行い、パラリンピックに関するある程度の知識を持たせた。
○通常学級と特別支援学級の生徒を同じチームにしてリレーに参加させることで交流の場を増やした。

6 取組内容

(1) 事前学習
　冬季休業中の課題として以下について調査した。
①オリンピック、パラリンピックの歴史、精神
② 2018 年平昌大会について
③パラリンピックの競技について

(2) パラリンピアンによる講話（横澤高徳氏：チェアスキー）
　健常者から障がい者となった経緯、チェアスキーに取り組みパラリンピックに出場するまで、生きる上で夢や希望を持つことの力

(3) パラリンピアンによる実技指導（同上）
　各種車いすの紹介、学級対抗車いすリレー

7 成果

(1) 事前学習によって、オリンピック、パラリンピックの文化的意義や価値を知った上でパラリンピアンの講義及び授業に臨んだため、より深い学びを得ることができた。
(2) パラリンピックについての知識を得たことにより、2018 年平昌大会および 2020 年東京大会以降のパラリンピックへの興味・関心を高めることができた。
(3) パラリンピアンから「夢や希望を持つことの力」などの話を聞き、自らの弱さや甘さに気づいたり、今後の自分自身の在り方について考えるきっかけとしたりすることができた。
(4) 実際にチェアスキーやバスケットボール用車いすに乗ったことによって、操作だけでなく、それを使用してスポーツを行うことの難しさを体験することができた。また、車いすを使用して生活することの困難さへの理解を深めることができた。
(5) リレーを同じチームで行うことにより、通常学級の生徒と特別支援学級の生徒の交流を深めることができた。

8 課題

(1) パラリンピアン個人の生き方に共感したり、今後の夢や希望の持ち方について考えたりすることができたが、オリンピック、パラリンピックの理念に迫るという点については不十分だった。
(2) 一斉授業としては人数が多く、全員に体験させるための時間が不足した。
(3) 安全面で留意させたつもりではあったが、チェアスキーの板でケガをした生徒がいた。

実践事例２　千葉県立矢切特別支援学校（千葉県）

① 取組、活動名

障がい者スポーツを通じた地域との交流活動

② 実施対象者

全校生徒 114 名
地域のスポーツクラブ 12 名
近隣高齢者施設 12 名
近隣小学校（第３学年）62 名
近隣小学校（特別支援学級）21 名
地域の老人会 10 名
大学生 11 名
「やきり de ボッチャ」外部参加者 70 名

③ 展開の形式

行事名：障がい者スポーツを通した交流活動
イベント名：「やきり de ボッチャ」

④ 目的、ねらい

障がい者スポーツを通した交流活動を通して、心の成長を育む
(1) 共生社会を目指し、障がい者理解を広げながら、お互いにかかわり方を学ぶ。
(2) パラリンピックへの関心を高めながら参画し、スポーツに取り組む。

⑤ 工夫

(1) 障がい者スポーツを通した交流活動
知的障がいのある児童生徒が取り組みやすいようにルールや活動内容の工夫をしたことで、児童生徒が主体的に交流活動に取り組むことができた。
(2) やきり de ボッチャ
本校の理解を広げると共に、地域で暮らす市民として参加者同士の交流も行うことができるよう、参加者の所属を関係なくミックスしたチーム編成で試合を行った。

⑥ 取組内容

(1) 障がい者スポーツを通した交流活動
今年度本校では、オリンピック・パラリンピック教育推進校と合わせて、「障がい者スポーツを通した交流活動」というテーマで県の研究指定を受け

ていた。障がい者スポーツとして「ボッチャ」を題材にし、学部ごとに交流相手を決め、本校生徒による出前授業の実施や一緒にゲームを行う等の交流活動に取り組んだ。

交流活動では、誰でも取り組みやすい障がい者スポーツである「ボッチャ」を交流のためのツールとしたことで、障がいの有無や年齢にかかわらず、一緒に楽しむことができた。また、交流活動を通して、本校の児童生徒に対する理解や障がいのある人に対する理解を広げる機会となり、「心のバリアフリー」の実現につなげることができた。

(2) やきり de ボッチャ

本校主催で、夏季休業中に地域とのボッチャ交流会として「やきり de ボッチャ」を実施した。地域の方々をはじめ、近隣の小中学生や高齢者施設の方々など、外部から約 70 名程度の参加があった。

多くの方々に参加をしてもらえたことで、矢切地区において「ボッチャ」が身近な障がい者スポーツとなった。また、ゲストアスリートとして千葉県をはじめ、日本や世界大会で活躍している選手を招聘し、選手の技や技術を見てもらえたことで競技を通して障がい者への理解を深めることができた。





7 成果

(1) 障がい者スポーツを通した交流活動・やきり de ボッチャ

誰でも取り組みやすい「ボッチャ」をツールとしたことで、障がいの有無や性別、年齢に関係なく、誰でも平等に「ボッチャ」を楽しむことができた。また、本校の児童生徒が日常的に取り組んでいる障がい者スポーツを通した交流の中で、本校生徒がボッチャのルールを小学校や高齢者施設に教えに行く出前授業を行ったり、一緒にゲームを行ったりする活動を通して、本校の児童生徒に対する理解が広がり「心のバリアフリー」の推進や共生社会の実現に向けての一歩となった。

8 課題

(1)「やきり de ボッチャ」の開催に関しては、「是非来年度もやってほしい」という声が多く、場所や時期等どのように取り組むか課題が挙げられた。

(2) 年間計画を立て、計画的に実践していくこと。

実践事例３　岐阜県立関高等学校（岐阜県）

① 取組、活動名

高等学校普通科と特別支援学校の交流会

② 実施対象者

関高等学校　50 名
（生徒会執行部 7 名、吹奏楽部 27 名、コーラス部 14 名、家庭クラブ 2 名）
関特別支援学校　高等部 28 名

③ 展開の形式

行事名：関特別支援学校交流会

④ 目的、ねらい

関高校、関特別支援学校（高等部）両校のスポーツを通じた交流を通して多様性への理解を深め、社会性を高めていくための一助とする。

⑤ 工夫

○教員はあくまでもサポート役であり、会の計画・準備から当日の運営まで、基本的に生徒が進めていく。また、関特別支援学校と関高校の生徒が、開閉会式からスポーツ交流に至るまで、役割を分担し、協力し合うように進めた。

⑥ 取組内容

(1) 事前打合せ
○生徒会執行部役員 7 名と生徒会担当者 2 名で、関特別支援学校を訪問担当の先生方と生徒会役員と顔合わせをした後、当日の内容、スケジュール、担当者の確認を行った。
○当日行う、車椅子バスケット、ボッチャ、ボウリングの会場を確認した。ボッチャに関しては、競技ルールが十分に知られていないということもあり、生徒会役員同士で（教員も交えて）練習試合を行った。
(2) 交流会（1 時間 40 分）
関特別支援学校生徒会の進行のもと、お互いの生徒会長の挨拶から交流会はスタートした。関高校より、吹奏楽部、コーラス部の発表をした後、3 班に分かれ、車椅子バスケット、ボッチャ、ボウリングを楽しんだ。およそ 1 時間、スポーツを楽しんだ後、両校より最後の挨拶とプレゼント交換が行われた。



手作りのプログラム


関高校の吹奏楽部の演奏


車いすバスケットの様子


ボウリングの様子


ボッチャの様子



プレゼント交換

テーマⅢ

7 成果

○一部の生徒ではあるが、自分とほぼ同じ年齢の、障がいを持った生徒が、溢れんばかりの笑顔を見せてスポーツを楽しんでいる様子を見、また一緒にプレイすることにより、大いに感じるものはあったであろう。関特別支援学校の生徒たちと触れ合う本校の生徒たちからも、心からの笑顔が多く見られた。障がいを持った人々を含む社会における多様性の理解と、色々な立場の人々と共に生きていく姿勢の涵養という点で、大変意義のある取り組みであった。

8 課題

○積極的に有志を募り、より多くの生徒たちに障がい者と障がい者スポーツを理解する機会を与えていきたい。

実践事例４　京都府立聾学校（京都府）

① 取組、活動名

スポーツを通した近隣学校との交流

② 実施対象者

高等部：卓球部８名　陸上競技部 14 名
中学部：卓球部及び陸上競技部 10 名
舞鶴分校幼稚部：４名、小学部：７名

③ 展開の形式

教科名：体育（中学部、高等部）
行事名：交流及び共同学習（分校幼稚部、小学部）
その他：部活動（中学部、高等部）

④ 目的、ねらい

○交流を通して、人権意識の向上を高め、あらゆる障壁に挑戦する力、意欲を身につける。
○障がいのあるなしにかかわらず、自分のできることに自信を持ち、他者とつながる気持ちを育む。
○大きな集団で活動し、個人の目標を達成する喜びを知る。

⑤ 工夫

【高等部】
○聾学校の教員から北嵯峨高等学校の生徒に対して聴覚障がいや手話についての説明を行った。短時間ではあったが理解をしてもらえた。
○交流当日では生徒同士での交流の場を多く設けた。聾学校の生徒も筆談などのコミュニケーションを使って、交流を深めることができた。
【中学部】
○中学部の練習開始後から北嵯峨高等学校の生徒と合流になるため、練習後に感想を発表したり、会話をしたり交流時間を確保した。
【舞鶴分校】
○事後に手紙の交換に取り組んだ。当日の写真や高校生からの手紙を校内に掲示することで、保護者にも交流の内容や取組の大切さを知らせることができた。

6 取組内容

【中学部、高等部】
①事前学習（北嵯峨高等学校生徒対象）
　ア 今回の活動の目的と活動内容について
　イ 京都府立聾学校について
　　（ア）聴覚障害について
　　（イ）手話について
　　（ウ）コミュニケーション方法について
　　（エ）困った時の対応などについて
②事前学習（本校中学部、高等部生徒対象）
　ア 今回の活動の目的と活動内容について
　イ 交流に向けての姿勢について





③交流当日
　ア 北嵯峨高等学校女子ソフトボール部と高等部陸上競技部
　　（ア）合同練習
　　（イ）試合（混合チーム）
　イ 北嵯峨高等学校卓球部と高等部卓球部
　　（ア）合同練習
　　（イ）試合



　ウ 北嵯峨高等学校陸上競技部と高等部陸上競技部
　　（ア）合同練習
　エ 北嵯峨高等学校卓球部と中学部
　　（ア）中学部校外マラソン大会に向けた取組



④事後学習
　取組後に感想等の交換等

【舞鶴分校】
①事前学習（西舞鶴高等学校女子バレーボール部員対象）
ア 今回の活動の目的と活動内容について
イ 京都府立聾学校舞鶴分校について
（ア）聴覚障害児・者の聞こえ方について
（イ）コミュニケーション方法について
手話による挨拶と名前の練習
（ウ）関わりをもつ上での留意点



②事前学習（分校幼稚部、小学部の幼児児童対象）
ア 今回の活動の目的と活動内容について
イ オリンピックやパラリンピックの歴史や実施種目、日本人の成績などについて
ウ 西舞鶴高等学校について
③交流当日
・西舞鶴高等学校女子バレーボール部との交流
（ア）バレーボールのデモンストレーション
サーブ、トス、アタックなどの練習の様子の参観
（イ）バレーボールの技術指導
ソフトバレー用ボールを使ったトスやレシーブの練習
（ウ）バレーボールによる交流
小学部：ソフトバレー
幼稚部：風船バレー



④事後指導
・取組後にそれぞれによる感想発表
・手紙による感想等の交流

7 成果

【高等部】
回数を重ねる毎にコミュニケーションを取ろうとしていた。技術は勿論のこと、練習や試合に取り組む姿勢や態度を学ぶことができた。合同練習をすることで北嵯峨高等学校の生徒を目標にして、終了後も向上心をもって練習に取り組めていた。大会で自己ベストを大幅に更新する生徒もいた。また、本校の生徒アンケートでも合同練習をして良かったなどの意見が多数で来年度も参加したいという回答がほとんどであった。
【中学部】
高等部の生徒以外の交流に対して、一年生は、初めての取組のため、恥ずかしさや自信のなさが障壁となり、消極的であったが、実施回数を重ねるご

とに積極的に活動し、北嵯峨高等学校の生徒との活動を楽しみに待つようになり、タイムも向上した。マラソン大会当日は、全員が目標タイム内で完走できた。

【舞鶴分校】

スポーツによる交流は初めての取組だったので、高校生と楽しく交流するだけでなく、バレーボールのルールを理解したり、スポーツへの興味・関心を高めたりする貴重な機会となった。高校生の練習の様子を間近に見ることで、その迫力やスポーツに取り組む真剣さを肌で感じることができた。事後も、休み時間にバレーボールに取り組む様子が見られた。

8 課題

○１年間又は複数年など、長期的に計画をして取り組みたい。
○担当者で実施状況が変わる。
○教育課程や移動時間などを考慮し、放課後等に実施するが、活動時間が短くなる。
○交流できる日程や時間帯が限られているので、計画的に実施したい。

実践事例５　京都市立日吉ケ丘高等学校（京都市）

① 取組、活動名

車いすバスケットボール体験を通した障がい者理解

② 実施対象者

第２学年（男子 78 名　女子 160 名）

③ 展開の形式

その他：LHR（ロングホームルーム）

④ 目的、ねらい

○車いす体験や交流試合、選手たちとの対話を通じて障がい者に対する理解を深め、人権意識を高めて、自分の生き方を考える機会とする。
○社会がどう変われば障がいのある人々が住みやすくなるのかを考える機会とする。
○車いすバスケットボール競技を通して、2020 年東京大会への関心を深める機会とする。

⑤ 工夫

○本校の英語村（校内留学体験施設）の取り組みと時期を合わせて実施した。昼休みを中心にオリンピック、パラリンピックの試合の様子の映像を流したり、クイズを行ったりして生徒の意識を高める取り組みを実施した。

⑥ 取組内容

(1) 選手紹介・競技説明・模範演技
　車いすバスケットボールの競技としての特性や練習・試合方法などを実際のプレイを見ながら学習した。
(2) 車いす体験（クラス対抗試合）
　生徒代表による車いすバスケットの試合を行った。先生チームもでき、生徒との試合も行った。
(3) 選手代表の体験談・質疑応答
　選手のお話を全員で聞いた。病気や怪我の経験、車いすバスケットボールとの出会い、生徒たちへのメッセージ等、生徒たちはとても感銘を受けた様子であった。
(4) 生徒代表からのお礼の言葉







7 成果

事前アンケートでは、障がい者スポーツに興味がある 103 人、興味がない 132 人であった。車いすバスケットボールの体験や貴重な体験談を通して、知ること、見ること、感じること、人を付き合っていくことで自分自身も変わっていくことを感じてくれた。

生徒の感想文抜粋

○リオパラリンピックを TV で見てから自分で種目やルールを調べたり、昔のパラリンピックの映像を見たりと興味を持っていたので、とても嬉しかったです。初めて間近で見たので、スピードの速さやターンの迫力に驚きました。2020 年の東京パラリンピックも今日みたいに近くで見てみたいなと思いました。

○私は将来、作業療法士に就きたいと思っています。体験やお話がとても勉強になりました。事故や病気で身体や精神に障がいを持ってしまった方の心情を理解し障がいとどのように向き合うかについて考えさせられました。一番印象に残ったことは誰かの呼びかけで世の中が広く見えることです。私も自分の一言で誰かの支えや助けになれたらいいなと思いました。

8 課題

競技用車いすを借りる場合の、他校との日程調整や運送費用の問題

実践事例１　白石市立大平小学校（宮城県）

1 取組、活動名

ベラルーシ代表新体操チームとの交流

2 実施対象者

全校児童 103 名

3 展開の形式

教科名：総合的な学習の時間、生活

4 目的、ねらい

○オリンピックに参加する国の文化や歴史等を知ることで、国際教育の充実を図り、豊かな心の育成を推進する。
○オリンピック競技選手と児童の直接的な交流を通し、オリンピックとスポーツに興味・関心をもたせる。

5 工夫

2020 年東京大会でも活躍が期待され、白石市で合宿を行っていたベラルーシ代表新体操チームへ交流をお願いした。教育委員会や市役所の方々に協力いただき、交流会を設定することができた。交流会では、日本の文化に触れさせる機会を設けた。昔遊びやソーラン節の紹介を通して、国際的な交流ができるよう工夫した。

6 取組内容

(1) 事前学習
【第 6 学年】
・ベラルーシについて調べ、交流会の準備をする。
（応援旗の作成、日本の昔遊びの準備）
【第 4・5 学年】
・もちつき体験やもち試食会のためのもち米を準備する。

(2) 当日
【全学年】
1．始めの会

2．ベラルーシ新体操チームによる種目紹介、児童の体験
3．伝統文化体験
・こま、竹とんぼ、けん玉、お手玉での遊び方を紹介し体験してもらう
・もちをついてもらい、準備してあるもちを試食してもらう
4．応援・プレゼント
・４年生以上でソーラン節を踊り最後に手作りの応援旗をプレゼントする。
5．終わりの会





7 成果

交流をもったことで、国際交流に対する意欲が高まった様子が児童の感想文から感じられた。選手を身近に感じることができたため、オリンピックへの関心も高まっている。東京オリンピックでの新体操以外の種目や活躍が期待される日本の選手を調べようとする児童も見られた。

【児童の感想文から】
○ 6m あるリボンを投げたり取ったりしていて，さすがオリンピック選手だなと思いました。実際に見ることができてよかったです。
○ ３年後のオリンピックではベラルーシの選手も応援したいです。そして，もっとたくさんの選手を応援できるように調べたいと思いました。
○私たちからのおもてなしで，昔遊びを楽しそうにやっていたのでよかったです。ソーラン節も思いが伝わったと思います。
○オリンピックではこれ以上のものが見られると思うと行きたくなりました。

8 課題

学校で行われている教育活動と関連付けることが難しかった。さらに、交流が決まってから様々なことに取り組み始めたので、見通しをもって推進することができなかった。年度当初に年間の計画を立てる必要があると考える。

実践事例２　南三陸町立志津川小学校（宮城県）

1 取組、活動名

南三陸杉とオリンピック、パラリンピックのつながり

2 実施対象者

第５学年 44 名

3 展開の形式

教科名：社会

4 目的、ねらい

○地元で産出される「南三陸杉」に興味をもち、新国立競技場の建築材として使用されるような取組を続けている方々の願いを知る。
○オリンピック、パラリンピックと自分たちの地域がどのように関連しているのかに気付き、オリンピック、パラリンピックに対する興味・関心を高める。

5 工夫

地元と 2020 年東京大会をつなげるものとして、「南三陸杉」を取り上げ、地元の方を講師に招いて話を聞くことで、オリンピック、パラリンピックだけでなく、地域についてより深く理解できるような学習過程となるよう工夫した。

6 取組内容

(1)「南三陸杉」について知る

地元の林業家である佐藤さんと「山の会」の工藤さんを講師として招き、地域の杉が「南三陸杉」として国際的な森林管理認証である FSC を取得し、新国立競技場の建築材として使われるかもしれないことを話していただいた。 杉は住宅を建てたり、工芸品の材料になったりするだけでなく、環境保全にとっても非常に大切なものであるということを絵や図を使って分かりやすく説明していただいた。また、FSC の認証を取得することで、「南三陸杉」がオリンピック、パラリンピックの会場となる新国立競技場の建築材として使われる可能性が高いことを話していただいた。





(2) 南三陸杉に触れる

実際に杉の木を削ってスプーンやフォークの柄の部分を製作する活動に取り組んだ。カッターや小刀、やすりを使って手触りがよくなるように仕上げることができた。製作したフォーク、スプーンは各自持ち帰り、実際に食事の際に使っている。



(3) 自分たちで調べたことを発表する

お話を聞いた後、杉やFSCについて自分たちで調べて模造紙にまとめた。後日、佐藤さん、工藤さんにもう一度学校に来ていただき、調べた内容を発表した。



テーマⅣ

7 成果

授業後の児童の感想から次のようなことが分かった

○自分たちの地域とオリンピック、パラリンピックが杉を通してつながろうとしていることに気付くことができた。

○地域のすばらしさに気付き、郷土に対する愛着を持つことができた。

8 課題

社会科とふるさと教育と関連させて行ったため、児童の意識をオリンピック、パラリンピックに向けさせることが難しかった。どうしてFSC認証を得ることが大切なのかをオリンピック、パラリンピックの精神を踏まえて意識させたかった。

実践事例３　成田市立久住小学校（千葉県）

1 取組、活動名

外国人観光客へのインタビューを通した国際交流

2 実施対象者

全校生徒 357 名　久住中学校第 1 学年 49 名　保護者 25 名
地域ボランティア 22 名　ALT 3 名（本校職員除く）
他機関協力者 9 名

3 展開の形式

教科名：総合的な学習の時間、国語、社会、英語、道徳

4 目的、ねらい

自国の文化や伝統に対する理解を図るとともに、積極的に他国の方とコミュニケーションを取り、よりよい関係を構築しようとする気持ちを育てる。

5 工夫

(1) 国際交流学習（1.2 年生・中学 1 年生）～買い物をしよう～
ダイナミックな活動になるように、体育館に多くの店、多くの品物を用意した。
中学生や保護者、地域住民を入れることで、多くの人と関わる場を設定した。（中学校が近い、保護者及び地域ボランティアが盛んという条件を生かした。）

(2) 国際交流学習（5 年生）～成田空港でインタビュー～
学校が成田空港に近いという利点を生かし、社会科の空港見学と併せて、空港で実際に外国人と関わる学習を取り入れた。

(3) 国際交流学習（6 年生）～成田表参道でインタビュー～
成田駅まで一駅という条件を生かし、外国人観光客の多い 6 月に参道での学習を実施。

(4) 伝統文化体験（6 年生）～牛馬作り～
学区内に伝わる伝統文化を知り、引き継いでいこうとする心情を育むため、地域の方を講師として招き、体験学習を実施した。授業の支援として保護者の協力を仰ぐことで、住民に対しても地区の伝統文化を伝えられるように計画をした。

6 取組内容

(1) 国際交流学習（1.2 年生・中学 1 年生）～買い物をしよう～
英語科の授業として買い物の場面を取り上げ、中学生、保護者、地域住民、

ALT を招き、それぞれの学年の授業で学習した構文を利用し、買い物学習に取り組んだ。





(2) 国際交流学習（5 年生）～成田空港でインタビュー～

社会科学習の成田空港見学と絡めて、英語科授業として外国人とコミュニケーションを図る学習を設定した。



(3) 国際交流学習（6 年生）～成田表参道でインタビュー～

成田表参道の外国人観光客にインタビューする学習を設定した。





(4) 伝統文化体験

①牛馬作り体験（6 年生）

②茶道体験（6 年生）

7 成果

(1) 学校で行っている英語科の学習の新たなめあてとしてオリンピック、パラリンピックを活用することができた。

(2) 児童にとって「おもてなし」という言葉の響きが、外国人とコミュニケーションを取る際に、相手のことを考えることにつながった。

(3) 高学年の児童にとっては、外国の文化を知り、理解しようとすることに加え、日本の文化（伝統文化を含め）を改めて見直そうとする機会となった。

(4) 学校外の国際交流学習を通して、英語圏以外の国に目を向けられる児童が増えた。

8 課題

(1) 1 ～ 4 年生までの国際交流学習において、外部人材を活用しているが、さらに活動を充実させていくためには、中学生、保護者、地域、ALT 等との連携を継続していくことが必要である。特に外国人との関わりを増やすために、新たな人材の開拓も必要である。

(2)「牛馬作り」に関しては、講師として招いている地域の方の高齢化や児童の増加に伴う真菰の確保等が難しくなっているため、実施方法の検討が必要である。

(3) 高学年の学校外活動は有効であるが、児童数の増加に伴い、外国人との関わりが減らないような計画が必要となる（場・時期）。安全面での配慮も重要となってくる。

(4) オリンピック・パラリンピック教育を教科・領域にどのように位置づけていくか、さらに教育課程の見直しが必要である。

(5) 時間の確保が難しいと思われるが、外国の文化を知る、学ぶという機会を増やしていくことが望ましい。

実践事例４　松戸市立大橋小学校（千葉県）

1 取組、活動名

二十世紀梨の栽培学習、梨とドミニカ共和国のつながり

2 実施対象者

第４学年 52 名

3 展開の形式

教科名：総合的な学習の時間

4 目的、ねらい

(1) 大橋小学校の二十世紀梨を大切に育てる伝統を引き継ぐと共に、お世話になっている地域の農家さんや鳥取の方などに感謝の気持ちを持って、引き継ぎ式でおもてなしをする。
(2) オリンピック、パラリンピックを通して、松戸の梨が外国との交流に役立っていることを知り、世界の文化を理解しようとする態度を育てる。

5 工夫

(1) 社会科の学習でも出てくる、地域の発展に尽くした人（今回は松戸覚之助）を、自分たちの活動を通して調べたことで、地域の伝統に目を向け、引き継いでいくことの大切さを実感させる。
(2) 自分たちが関わっている梨を通して、外国とのつながりが生まれていることを知り、自分たちの梨を大切に育てることを考えさせる。

6 取組内容

(1) 梨を育てる活動～引き継ぎ式

３年生の３学期に引き継いだ大橋小学校の二十世紀梨を一年間かけて世話をした。

４月の花粉付け、毎月の摘果、小袋かけ、大袋かけなどの作業を、農家さんにお手伝いしてもらいながら行ってきた。９月には 400 個を超える梨を収穫することができ、収穫の喜びを味わうことができた。12 月には、自分たちが育ててきた梨を３年生に引き継ぐための「引き継ぎ式」に向けての取り組みを行った。

二十世紀梨について、鳥取県とのつながりに着目し、松戸と鳥取とのつながりについて調べるグループや、一年間梨を育ててきて分かったこと、３

年生に引き継ぎたいと思うことを、自分たちの経験を入れて発表するグループ、ドミニカ共和国とのつながりについて発表するなどのグループも見られた。





(2) ドミニカ共和国とのつながりについて

2020年にオリンピック、パラリンピックが日本で開催されることを伝え、世界の国について知っていることを話し合った。梨が外国で栽培されているか知りたいということになり、梨農家さんの一人がドミニカ共和国に梨の木を送る活動をしていることを知り、その活動について教えていただく授業を行った。

梨の話ばかりではなく、ドミニカ共和国の人柄、食文化など様々な視点からお話を伺った。児童は、松戸市とドミニカ共和国との交流に、松戸市の梨が大きく関わっていたことに関心を持ち、その後の引き継ぎ式への意欲付けとなった。



テーマⅣ

7 成果

(1) 梨を大切に育てる活動～引き継ぎ式

梨を育てる活動は、例年伝統的に第4学年が行っているため、児童は意欲的に取り組んでいた。また、引き継ぎ式では自分の経験を生かした発表内容になるよう、引きつぐ内容にこだわりを持って取り組ませることができた。

(2) ドミニカ共和国とのつながりについて

自分たちの育てた梨と外国とのつながりがあることに、関心が高まった。また、いつも教えに来てくださっている農家の方がゲストティーチャーだったことで、より身近に外国とのつながりを捉えることができた。

8 課題

(1) 梨の仕事では、地域の農家さん方や、鳥取県の方々との日程調整に苦労した。

(2) 実際にドミニカ共和国の方にゲストとしてお越しいただきたかったが、都合がつかず叶わなかった。

実践事例５　能登町立宇出津小学校（石川県）

1 取組、活動名

日本と世界の音楽の理解

2 実施対象者

第６学年 35 名

3 展開の形式

教科名：音楽

4 目的、ねらい

日本と世界の音楽に親しみ、日本と世界の文化の理解、多様性を尊重する態度を育てる。

5 工夫

(1) 演奏を聴いてその音楽の国を当てるというクイズ形式で学習を進めたことにより、聴き慣れない国の音楽や楽器に対する関心を高めることができた。
(2) 雅楽「越天楽」のよさを ALT に紹介したり、自分がいいなと思った国の音楽のよさを友達に伝えたりするために「おすすめキャッチコピー」を考えるという相手意識・目的意識を明確にした活動を工夫したことにより、学習に主体的に協働的に取組む姿が見られた。

6 取組内容

【1 時 /4 時間】
①「越天楽今様」を歌ったり、雅楽「越天楽」の鑑賞や、使われている楽器についての説明を聞いたりして、日本に古くから伝わる音楽や楽器についての学習意欲を高める。

【2 時 /4 時間】
①雅楽「越天楽」を「楽器の音色」「旋律」「リズム」に着目してもう一度鑑賞し、自校の ALT(アメリカ人) に紹介するための「おすすめキャッチコピー」を考える。

【3 時 /4 時間】
①世界地図と５か国（イギリス・トルコ・中国・アルゼンチン・インドネシア）の国旗やそれぞれの国の楽器の写真等の掲示をもとに音楽を聴き、それがどの国の音楽かというクイズに答える。
②それぞれの楽器の特徴や説明を聞き、世界の国々の音楽に対する関心を高める。

【4 時 /4 時間】
①前時に聴いた中から同じ音楽を選んだ者同士、３～４人のグループになって、「楽器の音色」「旋律」「リズム」に着目して何度も聴きながら、その曲の「おすすめキャッチコピー」を考える。
②それぞれのグループで考えた「おすすめキャッチコピー」を発表し合い、「キャッチコピー」によってもう一度聴いてみたいと思った音楽を全員１曲ずつ選び合う。選んだ人数が多かった順に、５曲をもう一度鑑賞し、最後に学習のふり返りをする。





7 成果

(1) 一つの音楽を何度も聴きながら、楽器や音楽の特徴やよさを言葉で表現しようとする姿が見られた。また、どの国の楽器や音楽にも、それぞれによさがあるということに気づいたり、その他の国の楽器や音楽への関心を高めたりすることもできた。

8 課題

(1) 今回、視点を与えることによって、「聴く」という活動がより具体的で探究的なものになると共に、言語表現がしやすくなると考え、「楽器の音色」「旋律」「リズム」という３つの要素に着目させた。しかし、世界の国々の音楽に親しむという、本時のねらいを考えると、もっと自由に音楽を聴き、親しみ、そのよさを伝え合う学習活動を展開できるとよかった。
(2)３～４人のグループを作ると９グループになり、授業のタイムマネージメントが難しくなるが、「キャッチコピー」についての説明や、感想交流などの場面で、もっと児童が発言できるとよかった。児童が積極的に伝え合うことのできる授業づくりをしていくことが課題である。

実践事例６　京都府立西乙訓高等学校（京都府）

1 取組、活動名

日本の伝統文化（華道・茶道）の体験

2 実施対象者

第２学年５組グローバルコース 33 名

3 展開の形式

その他：国際交流、国際理解

4 目的、ねらい

短期留学として訪問中の海外の高校生と交流する内容として、日本の伝統文化であり、京都ならではの「華道」「茶道」を一緒に体験することでおもてなしの心を育成する。

5 工夫

海外の生徒との交流では、実際に手を動かしながら、出来るだけコミュニケーションをとることを心がけた。日本人と違ったところに関心を持つことがあるので、一つ一つの動作を確認しながら行った。

6 取組内容

【華道体験】平成 29 年６月８日（木）

華道小松流「中村展山先生」による華道教室短期留学中のアメリカ合衆国ミネソタ州シャコピー高校生９名が、２年５組グローバルコースの生徒と共に華道の体験を行った。ペアとなった生徒に英語で説明を聞きながら、バランス等を考えながら生け花を体験した。



日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成

【茶道体験】平成 29 年 7 月 13 日（木）
　小松流から、茶道の講師として「中村仁美先生」をお迎えし、アメリカ合衆国マサチューセッツ州アーリントン市からの訪問団の高校 9 名と中学生 7 名が 2 年 5 組グローバルコースの生徒と共に茶道の体験を行った。





7 成果

　華道体験では､生徒は日本の文化に触れて楽しそうであった。茶道体験では、飲み慣れない日本のお茶を体験し、日本の文化について理解できたと考えられる。

8 課題

　オリンピック、パラリンピックの実際の競技に対する理解についても深める必要がある。しかし、本校生にとっては、将来的に関わりを持つことを具体的にイメージすることが難しい。国際理解を深め、コミュニケーションの大切さを理解した後に、どのように関わりを持ち、日本の文化の発信も出来るかが課題の一つである。

実践事例７　福山市立霞小学校（広島県）

① 取組、活動名

各教科を活用した国際理解の促進

② 実施対象者

児童 125 名（第 1 学年 43 名、第 2 学年 37 名、第 5 学年 36 名、特別支援学級 9 名）

③ 展開の形式

教科名：国語、社会、音楽、道徳

④ 目的、ねらい

○スポーツの意義や価値等に対する関心の向上、障がい者理解、ボランティアマインドの育成、国際理解等の育成すべき資質・能力を教科等の関連を図りながら、全ての教育活動を通してオリンピック・パラリンピック教育を行い、幅広くオリンピック、パラリンピックに関われるようにする。

⑤ 工夫

○重点的に育成する資質・能力を定め、どの単元で付けていくのかを明確にするために、「年間指導計画」にオリンピック・パラリンピック教育を位置付けた。

⑥ 取組内容

(1) 国語科「カタカナ・漢字」（1 年生）
　外国人の名前、外国に由来するもの、外国の地名はカタカナで表記する。
　漢字は中国から来た文字。
(2) 音楽科「拍子を感じてリズムをうとう」（2 年生）
　日本のお祭りの音楽に親しむ。
(3) 道徳「シンガポールの思い出」（5 年生）
　各国の歴史の違いを知り、世界の多様な文化を考える。
(4) 社会科「店で働く人々の仕事」（特別支援学級）
　食べ物について、日本と外国との関係をとらえる。

7 成果

○日々の授業に関してオリンピック・パラリンピック教育の視点を持って実践することができた。
○オリンピック、パラリンピックへの興味・関心を高めることができた。

8 課題

○教科等を中心とした全ての教育活動でオリンピック・パラリンピック教育を位置付けたが、精選しきれていなかった。

実践事例８　大阪市立木川南小学校（大阪市）

① 取組、活動名

オリンピアン、パラリンピアンとの交流

② 実施対象者

児童 56 名

③ 展開の形式

教科名：体育、特別活動
その他：学校行事

④ 目的、ねらい

○学力や体力の向上に意欲的に取り組む児童
○他者を思いやる心をもち、共に助け合って生きようとする児童
○我が国の郷土を愛し、他国を尊重し、平和を愛する児童

⑤ 工夫

大阪市がオーストラリアのホストタウンであることと関連して、計画をたて、実践することができた。

⑥ 取組内容

①オリンピック、パラリンピックについて知ろう
◇スポーツ庁より配布された映像資料を視聴し、オリンピック、パラリンピックの概略を知る。
・オリンピックやパラリンピックの歴史的経過
・オリンピックやパラリンピックと日本との関わり
◇『I’ m POSSIBLE』を使用して、パラリンピックを知ろう
・これは、何？「競技用義足」「タッピング棒」
・「パラ」の意味は？
・「スリーアギトス」の意味は？
②車いすバスケットボールを体験しよう
・車いすバスケットボールの体験及びパラアスリート北間優衣さんの経験談を聞くことや交流することで、パラスポーツについて理解を深める。

・実際に児童全員が、競技用車いすに乗って体験する。

③オーストラリアのことを知ろう

オーストラリア女子車いすバスケットボールチームとの交流に向けて、オーストラリアネイティブの先生よりオーストラリアの文化（学校生活等）を学ぶ。

④体操を体験しよう

・体操の体験及びオリンピックアスリート沖口誠さんの経験談を聞くことや交流することで、オリンピックスポーツについて理解を深める。

・マット運動等を全員が体験する。

⑤オーストラリア代表女子車いすバスケットボールチームと交流しよう



7 成果

○児童は一連の取り組みを通して、オリンピック、パラリンピックについて、興味・関心を少しずつ、もつことができるようになってきた。

○オリンピアンと交流し、高度な技を披露していただいたり、実際にメダルに触れさせていただいたりすることにより、オリンピックを身近に感じることができた。

○パラリンピアンと交流することによって、スポーツ、特にパラスポーツに対して知ることができた。

○オーストラリア女子車いすバスケットボールチームの交流していく過程で、オーストラリアのことについて学ぶことができたり、諸外国に対して関心を持つことができたりした。また、英語学習に対する意欲も深まった。

○スポーツを通して、他者に対する思いやりの心を醸成することができた。

○各学年で 2020 年東京大会のマスコット投票を実施することにより、低学年児童から、2020 年東京大会に対する興味を持つことができた。

8 課題

ホストタウンとの関連付けをどのようにしていくか、検討の余地がある。

実践事例９　北九州市立長尾小学校（北九州市）

① 取組、活動名

タイ国立プラサンミット小学校との交流

② 実施対象者

全校児童 434 名

③ 展開の形式

その他：国際交流、国際理解

④ 目的、ねらい

国際理解の心情やおもてなしの心の育成と、誰もが気持ちよく生きるために必要なことについて考え、実践していこうとする心情を養う。

⑤ 工夫

2 年生の「おもてなし講座」（平成 30 年 1 月 12 日 (金)）

2020 年東京大会が開催される際には 5 年生として長尾小の要となる 2 年生を対象に、筑波大学客員教授：江上いずみ先生を講師としてお招きし、「おもてなし講座」を実施した。おもてなしと思いやりの心をもって人と接すると相手も自分も周りの人もいい気持ちになれることを教えていただいた。とくに、「挨拶は相手に何と言っているかが分かるように顔を上げたまま言葉を発し、その後に頭を下げること」については、教えていただいてすぐに行動に移し、気持ちのよい挨拶をする姿が見受けられるようになった。

⑥ 取組内容

○事前学習

「こんにちは」「さようなら」の挨拶や授業の始まりと終りの号令、授業で必要な言葉をタイ語に訳して、学年毎に練習した。また、北九州市が 2020 年東京大会において、タイのホストタウンに決定したことを児童に教えるとともに、世界地図の中の日本とタイの位置関係やそれぞれの文化について学習した。

○取組内容

【1 日目】

○児童で歓迎集会

○４年生と「連合音楽会の練習」

○６年生と「陸上記録会の練習」

○１年生と「昔遊び」→はねつき・けん玉・あやとり・お手玉・竹とんぼ・折り紙



【2 日目】

○２年生と「体育あそび (出会いのゲーム・おごっこ)」
「音楽あそび (みんなで歌おう・歌でゲーム)」
→「ぞうさん」をタイ語で合唱

○３年生と「習字」
→事前に一つ一つの道具の名前をローマ字で書いたカードを作成し、それを示しながら道具の使い方を身振り手振りで説明していた。

○５年生と「外国語活動」と「調理実習 (ご飯とみそ汁)」

○事後学習





テーマⅣ

7 成果

○全学年がタイの小学生と交流し、学校を挙げてタイの言葉や文化を調べたり、日本の遊びや文化を教えるための準備をしたりすることを通して、児童一人一人がタイの子どもたちと積極的に関わることができた。

○中学年の児童は、歓迎集会でタイの子どもたちが披露してくれた踊りや衣装に興味をもち、積極的に話しかけていた。また、地域のボランティアの方々の協力により、お茶や着付け体験を実施した。他国の小学生との交流を通して、世界の中の日本を意識するとともに、言葉や文化の違いだけでなくそれぞれのよさについて考えるきっかけとなった。

8 課題

タイの小学生との交流は、本年度のみであるが、今後はタイのホストタウンとしての北九州市の動向を基にした取組を計画する。

実践事例１　盛岡市立厨川中学校（岩手県）

① 取組、活動名

保健体育科体育理論領域の授業と関連付けたオリンピック教育

② 実施対象者

第１学年　194 名（男子 99 名、女子 95 名）

③ 展開の形式

教科名：保健体育（体育理論）

④ 目的、ねらい

○運動やスポーツには、特有の技術や戦術があり、その習得の仕方には一定の方法があることを理解する。
○過去の日本選手、日本チームの技術・戦術を分析し、今後の日本のメダル獲得に向けた戦術・戦略を予想する。
○体育の授業（理論学習）からスポーツを「見る力」を養い、2020 年東京オリンピックへの興味・関心を高める。

⑤ 工夫

○早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターと共同で、事前学習として保健体育科体育理論領域の授業実践を構想した。その際、オリンピアンの講演につながる内容を設定した。

⑥ 取組内容

○事前学習（1 時間）
第１学年を対象に、以下の保健体育科体育理論領域に関する授業を実施
題材：2016 リオデジャネイロオリンピック陸上男子４×100m リレー（銀メダル獲得の裏側）
＊個人能力で劣る日本リレーチームが、銀メダルをとれた訳
＊アンダーハンドパスのメリット・デメリット
＊ 2020 年東京オリンピックに向けた更なる秘策
○オリンピアンの講演（宮下純一氏：競泳）
＊４人各自の明確な目標タイムの設定、それに向けた泳ぎ込み
＊第１泳者：宮下選手（背泳ぎ）、第２泳者：北島選手（平泳ぎ）を軸に、前半リード、後半我慢のレース展開
＊引継ぎ（タッチ＆スタート）の時間短縮







7 成果

○個人的な能力では劣る日本人でも、戦術や戦略によっては世界と対等に競い合える可能性があることに気づくことができた。2020 年東京オリンピックでの日本選手の活躍に、一層興味・関心を高めることができた。
○生徒の感想（3 年女子）
「今日の講演を聞いて、宮下さんの恩師の言葉が印象に残りました。壁は誰にでもあり、誰にでも越えられるのだから、私もあきらめずに様々なことに挑戦しようと思いました。また､3 つの C のお話も印象に残っています。自分の体験と重ね合わせたときに、確かにそうだなあと感じました。私の change は陸上部の仲間の言葉です。不真面目だった私が、周りの人の言葉などによって真面目に部活動に取り組むようになりました。ですから、『出会いに感謝』というのにとても共感しました。今、私は陸上の高跳びをしていて、将来、世界で活躍できる選手になり、『日本人は背が低いから跳べない』という常識を塗り替えたいという夢があります。一時あきらめようと思ったこともありましたが、今日の講演を聞いて、叶うまで頑張ってみようと思いました。ありがとうございました。」

8 課題

○実践を繰り返す中での指導案（指導マニュアル）の検討、修正
○他学年、他分野での指導案（指導マニュアル）の作成、提供
○指導案の有効性を図る検証方法の構築

実践事例２　筑西市立新治小学校（茨城県）

❶ 取組、活動名

オリンピアンによる講演と柔道体験

❷ 実施対象者

全校児童 470 名　教職員 30 名　保護者 10 ～ 20 名

❸ 展開の形式

行事名：オリンピック選手の話を聞こう

❹ 目的、ねらい

オリンピックに出場しメダルを獲得した選手の体験談を聞くことでスポーツに対する興味・関心を高めるよい機会とする。

❺ 工夫

○今回は、全児童一斉に行うため、低学年の集中力が続くかどうかが心配なところであったので、デモンストレーションを行うなどして、児童の集中力が持続するようにした。
○本校児童の中で、柔道を習っている児童と平岡選手に約束稽古を行っていただいた（保護者からは事前に文書による説明を行い、許可を受けた）。これは当日の平岡選手の計らいによるものであるが、本校の全児童にロンドンオリンピックの銀メダルを触らせていただけた。

❻ 取組内容

2012 年ロンドン大会柔道男子 60g 級銀メダリストの平岡拓晃選手の体験談を聞く。また、柔道競技を身近に見たり、体験したりすることで競技の素晴らしさを知る。

(1) 事前指導

オリンピックについての理解を深める。（学級活動）

・2020 年に自国開催（東京）で開かれること。
・平岡選手の経歴
・2012 年ロンドン大会で、柔道 60kg に出場し銀メダルを獲得したこと。

(2) 当日

①プレゼンや動画により平岡選手の柔道を知る。
②練習パートナーとの約束稽古を見学する。
③本校の柔道経験者との約束稽古を行い、全員が見学する。
・プレゼンを含めた自己紹介



スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

・筑波大学の学生とのデモンストレーション



・本校児童とのデモンストレーション。1 学年から 6 学年まで 6 名の児童と技をかけあった。





・全児童が 2012 年ロンドン大会の銀メダルを触らせていただいた。



(3) 事後指導

自分が感じたことを学年の実態に応じ作文等にまとめる。

7 成果

○オリンピックやパラリンピックに対する興味・関心が高まったと考えられる。(特に講演会直後は、オリンピックやパラリンピックのことを話題にあげる児童が多く見られた。)

○一流の柔道家の技を間近に見ることで、柔道に関する興味･関心が高まった。講演会後、新たに柔道を習いたいと話している児童が見られた。

○柔道にだけでなくオリンピックやパラリンピックに対する興味・関心が高まったと考えられる。

○平岡選手の「失敗はダメじゃない」という話は児童にとっても分かりやすいものあったと同時に、平岡選手の人間性に触れることができた。そのため、平岡選手の退場のときには、児童が自発的に平岡選手の前に並び握手をするという光景が見られた。

○実際に、平岡選手と約束稽古をしていただいた 6 名とその保護者は大変喜んでおり、柔道競技を続けるよい意欲付けとなったと考えられる。

8 課題

○講師の確保をするのが難しい場合もある。どのようなところに講師依頼をすればよいのかが見当が付かなかった。また、講師が決まっても内容や時間など電話やメールでのやり取りとなるので、この会場、この進め方で大丈夫なのかと心配になることも多かった。

○講師の先生にプレゼンを用意していただいたが、本校の場合、スクリーンが小さく後ろの児童からは見にくく残念であった。大型のスクリーンに投影できると学習効果も上がってくることが考えられる。

実践事例３　千葉県立一宮商業高等学校（千葉県）

1 取組、活動名

オリンピック競技会場地における各種イベントへの参加

2 実施対象者

全校生徒 479 名

3 展開の形式

教科名：体育、総合的な学習の時間、課題研究
その他：ボランティア
イベント名：第１回波乗れコンサート、渚のファーマーズマーケット、オリンピック・パラリンピック開催３年前イベント、オリンピック・パラリンピックフラッグツアー、九十九里トライアスロン清掃ボランティア、九十九里トライアスロンボランティア、一宮町オリンピック推進課インターンシップ

4 目的、ねらい

仲間とスポーツに親しみ、楽しさや感動を分かち合う生徒の育成を図るとともにインクルーシブな社会を理解しボランティア精神と心温まるおもてなしの気持ちを育てる。

5 工夫

(1) オリンピック正式種目となったサーフィン競技に対する認識の低さがあることから、地域の人達に競技の紹介をすることから機運の醸成を図ることにした。
(2) 障がい者スポーツを体験し、障がい者の気持ちや共生社会の必要性を実感した。

6 取組内容

(1) 第１回波乗れコンサート開催
本校主催・一宮町共催。サーフィン誘致を契機としてシビックプライド向上のため開催。企画・構成から生徒が作り上げていった。
(2) 渚のファーマーズマーケット参加
会場内にブースを設置し、オリンピック開催機運を盛り上げる活動を実施。
(3)WSLQS6000　サーフィン大会取材
一宮商業・一宮中・一宮小・東浪見小の児童生徒が協力して大会を取材。多くの選手や観客の声



スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

を集めて広報パンフレットの素材として利用。



(4) 一宮町サーフィン業組合と協力し生徒による広報パンフレット作成

「なみのれた～」第１号を制作し、地域に配布しサーフィンの魅力を独自に広報。

(5) オリンピック・パラリンピック開催３年前イベント参加

組織委員会主催のサーフィン大会会場地で、周辺の清掃作業を参加者と共に実施。







(6) 平成 29 年度千葉県高等学校生徒商業研究発表大会兼関東地区高等学校生徒商業研究発表大会千葉県予選会出場

「シビックプライド向上計画～地域とともに『波乗れ一宮！』～」に関する活動を紹介し、最優秀賞を受賞。関東大会に出場。

(7) ボランティア活動

九十九里トライアスロンにエイドステーションボランティアとして参加。







テーマⅤ

7 成果

(1) スポーツの楽しさと厳しさを実感できた。

(2) オリンピック、パラリンピックが選手や競技団体だけで開催するのではなく、大会を支える人が他にも多く必要であることを実感した。

8 課題

(1) オリンピックのサーフィン種目会場地にある学校として、今後地域・競技団体等とどのように活動を進めれば機運の醸成を図れるのか。

(2) 大会開催時にボランティアへの参加を予定したいが、どのようなボランティアに参加できるのかが不明。

(3) ゆめ半島千葉国体の時に生徒・職員の動員があったが今回はどのようになるのか不明。

(4) 予定していたパラリンピック出場予定選手がケガのため講演会が開催できなかった。ケガ等により開催できない場合の対応が困難である。

実践事例４　千葉県立桜が丘特別支援学校（千葉県）

1 取組、活動名

全国特別支援学校ボッチャ甲子園への出場

2 実施対象者

全校生徒 169 名

3 展開の形式

教科名：体育
行事名：ボッチャ甲子園

4 目的、ねらい

(1) 障がい者スポーツ、生涯スポーツを通して目標に向かって仲間と共に努力することやスポーツや身体を動かすことへの親しみや楽しさを感じながら興味関心を高める。
(2) スポーツを通じて、地域や他校との交流の中で互いに支え合い、互いを尊重し合える心の育成につなげる。

5 工夫

(1) ルールに関しては、学校の授業で取り組んでいるルールと異なるため、大会に準じたルールを細かく確認を行った。
(2) 大会当日はもちろん、練習の中でも常に目標をもって取り組むための働きかけを行うようにしていた。
(3) 試合の中では、近くでコーチからの指示ができないため、自分たちで協力し合える状況作り（話し合い等も含めて）を心がけるようにした。

6 取組内容

高等部を中心に、選抜チームをつくり全国特別支援学校ボッチャ甲子園に出場する取り組みとした。

(1) 事前

５月に選手選考を行い、４名が選手として決定した。５月下旬から７月の大会までの期間、放課後の時間を利用して練習に取り組んだ。それぞれが自分の投球フォームを確認したり、確実にねらったところに投げられるように、投げ方や投げる姿勢、投げる強さなどを調整したりした。ランプ（補助具）を使用する選手は、サポートの職員と一緒にランプの高さや長さ、角度などによってボールが届く位置を一緒に確認しながら、当日に向けて、

自分で考えて伝えられるようにも練習していった。また、チームとして、試合の進め方の作戦を考えたり、状況によって投球順を相談できるようにしたりと、当日の大会に向けて一人一人の技術とチーム力を高めていくようにした。

(2) 当日

会場の雰囲気に緊張しながらも、全国各地から集まる強豪チームの中で、初戦突破。試合運びも、一人一人の投球も良く、勝利につなげることができた。2回戦目は、試合の中での一投が、大きく流れを左右し、なかなか自分たちのリズムをつくることができず、惜しくも敗退となった。全国の壁を感じるとともに競技への興味がより高まった大会となった。また、会場には、ボッチャ日本代表の選手も来ていて、交流することができた。

(3) 事後

大会出場後、大会当日の様子や感想について振り返る時間を設定した。全国の壁の高さや、まだまだ練習をしてうまくなれるという挑戦や自信にもつながった。大会後は、今度は学校行事である、千葉県特別支援学校体育連盟主催の高等部ボッチャ大会に向けての取り組みにつなげた。





7 成果

(1) 様々な大会への出場をきっかけに、競技への興味・関心がより深めることができた。また、仲間を意識し、チーム力を高めることができた。

(2) 大きな大会に参加することで、全国の仲間や日本代表選手と交流できる機会となり、経験の幅・視野を広げる良い機会となった。

(3) 目標に向かって努力することで、結果によって達成感だけではなく悔しさなども味わうことで、次の目標やまた挑戦してみたい等の前向きな気持ちをもつことができるようになった生徒もいた。

8 課題

(1) 学校として、多くの大会へ出場しているため、取り組みを進めるにあたり、校内での職員の協力体制が欠かせない。

(2) 安全に練習が進められるように、人的・物的に環境整備を行っていく必要がある。

(3) 大会参加に当たり、校内での選手選考の方法の検討。

(4) 競技に関する職員への周知・理解。

実践事例５　伊豆市立修善寺南小学校（静岡県）

1 取組、活動名

フラッグツアーと関連付けたオリンピック教育

2 実施対象者

全校児童 266 名

3 展開の形式

教科名：総合的な学習の時間（第４～６学年）
その他：中休み（第１～３学年）、昼食（特別支援学級）

4 目的、ねらい

フラッグツアー等に参加することでオリンピック、パラリンピックについて関心を持ち始めた児童が、競歩のオリンピアンに競技生活に関する話を聞いたり、競歩の歩き方を体験したりする活動を通して、オリンピック、パラリンピックについてさらに興味を深め、スポーツに親しもうとする気持ちをもつことができる。

5 工夫

オリンピック、パラリンピックへの興味を深めスポーツに親しもうとする気持ちをもたせるためには、まずオリンピアンとのふれあいをすることが必要であると考え、オリンピアンの訪問を要請しての事業を計画した。メディアの向こう側の存在が目の前で語ってくれたり、一緒に体を動かしてくれたりすることは児童にとって大きな宝物になるとともに、これからの様々な活動のエネルギーの源となると思う。また、オリパラ関連書籍を置いた図書コーナーや山崎選手の情報を掲載した情報コーナーも設置した。さらに、「学校だより」に山崎選手が来校したときのことを掲載し、地域へもオリパラへの情報発信を行った。

6 取組内容

(1) オリンピアンによる実技指導（山﨑勇喜氏：競歩）
・1～3年生を対象とした競歩の歩き方体験（15分）



(2) オリンピアンによる講演（同上）
・4～6年生を対象とした競歩やオリンピックについての内容
（各クラス45分）



(3) 給食の時間を利用したオリンピアンとの交流（特別支援学級）

7 成果

(1) オリンピアンを迎えるにあたり、選手や競技、オリンピックについての紹介コーナーを設けることで児童が事前に予備知識を得ることができた。オリンピック、パラリンピックへの興味関心が高まるとともに、競歩に関して学んだ上でオリンピアンを迎えることができた。
(2) オリンピアンに幼少期からオリンピック出場までの話、さらに2020年東京大会を目指しているという話を聞き、あきらめずに努力を続けること、周りの人たちへの感謝の気持ちを忘れないことが大切であることを学んだ。穏やかな優しい語り口で、話の内容が児童の心に響いた。
(3) 三大会連続出場のオリンピアンとのふれあいということで、児童の目の輝きがすばらしく、最後まで意欲的に活動していた。

8 課題

今回のようにオリンピアンの訪問を要請する場合、何のつてもない学校においては、オリンピアンを選び、交渉し、所属団体や関連団体との連絡を取り合うことは困難を極める作業である。事業の中身はいろいろ考えられるが、児童にとって最もインパクトのあるのがオリンピアンとのふれあいであるので、対応してもらえるオリンピアン、パラリンピアンのリストを作っていただけるとありがたい。

実践事例６　東広島市立小谷小学校（広島県）

① 取組、活動名

「正々堂々フェアプレー宣言」の作成を通したスポーツの価値の学習

② 実施対象者

第６学年 41 名

③ 展開の形式

教科名：体育（ゴール型：フラッグフットボール）

④ 目的、ねらい

○スポーツの価値について視野を広げ、体育科の学習（フラッグフットボール）で大切にしたいことについて考え、行動目標を守りながら学習に参加しようとする意欲をもたせる。

⑤ 工夫

○対象児童が第５学年時にフラッグフットボール単元を経験していることを受け、その反省に立って考えを深められるようにした。
○話し合いのグループをフラッグフットボールのチームで編成し、キャプテンを中心に活動できるようにした。
○事例を紹介する際に、動画を用い、具体的なイメージをもって考えることができるようにした。
○話し合いの結果を「正々堂々フェアプレー宣言」として整理し、フラッグフットボールの学習中に常時掲示した。

⑥ 取組内容

○話し合いを通した「正々堂々フェアプレー宣言」の作成
①事前に行ったフラッグフットボールのオリエンテーションを想起させ、「スポーツはなぜするの？フラッグフットボールの学習で大切にしたいことを話し合おう」というめあてを確認させる。
②現段階で理解しているスポーツの価値について交流させ、ランキングを行うことで、スポーツがもつ「楽しさ」について考えさせる。

③事例１　チーム競技：ドイツ・ブンデスリーガ「ニュルンベルクVSブレーメン」（2014.3.8）を基に、フェアプレーについて話し合わせる。
④フラッグフットボールの学習で大切にしたいことを、チームごとに話し合い、短冊にまとめさせる。
⑤チームごとに出された意見を、５つ程度に整理する活動を通して、スポーツのもつ楽しさを達成するために大切にしたいことを考えさせる。
⑥事例２　個人競技：冬季オリンピック大会（2002）フィギュアスケートで村主選手が他国の選手に競技用タイツを貸した事例を基に、フェアプレーの大切さと個人の信念の大切さを印象付ける。
⑦振り返りとして、この学習を通して考えたこと、フラッグフットボールの学習を通してがんばりたいことをノートに記録させる。

正々堂々フェアプレー宣言
1「スポーツは楽しむためにしている」を忘れない。
2　スポーツの時は、だれもが平等。ルールを守る。
3　相手がいるから楽しい。あいさつ・あく手をする。
4　目標に向かってチームで協力する。
　本気で練習・本気で試合・本気で話合い
5　負けてもくじけない。失敗しても励ます。次に生かす。
6　準備や後片付けは、全員で気持ちよくする。

7 成果

○フラッグフットボールの学習中、セルフジャッジを公正に行おうとする、競技開始時・終了時の挨拶を丁寧に行おうとするなどの姿が見られた。
○単元の事前事後児童アンケートにおいて、協力と公正の項目で高まりが見られた。（「友だちとアドバイスをし合う」の「あてはまる」回答率 34.1%⇒85.4%、「ゲームに負けても素直に負けを認める」の「あてはまる」回答率 75.6%⇒100%）
○スポーツを「する」だけではなく、スポーツについて知ったり、考えたりする座学の時間を設定し、関連付けることで、「見たい」「支えたい」「知りたい」という関心の高まりが見られた（本校実施質問紙調査による）。

8 課題

○事例としてサッカーとフィギュアスケートを用いたが、これらの種目に対する関心や知識に個人差が大きく、指導者による補足説明が必要であった。授業計画段階において情報収集をする際、児童の発達や実態に応じて検討するだけの十分な事例を集めることが難しい。

実践事例７　久留米市立大城小学校（福岡県）

① 取組、活動名

オリンピックの新種目の創造

② 実施対象者

全校児童 225 名

③ 展開の形式

教科名：体育

④ 目的、ねらい

3m の縄やスカットボーイを活用した自分たちでできるオリンピックの新種目を考えること通して、オリンピックを身近なこととして考えることができる。

⑤ 工夫

オリンピック、パラリンピックをより身近で運動の楽しさを実感するために、「オリンピック・パラリンピックコーナーの設置」「オリンピック新種目を考える活動」を位置づけたこと。

⑥ 取組内容

オリンピックの新種目の創造

オリンピック種目に興味を持ってもらおうと、「もし、オリンピックの新種目ができるとしたらどのような種目ができそうか」と児童に提案した。 話し合いの中で、以下に決定した。

①運動会の大縄綱引きをヒントにして、短い縄（カラーロープ）を使って新種目ができると楽しく少人数でも楽しめるという意見を基にした、『ショート綱引き』

②オリンピック種目のやり投げからヒントにした、『スカッとやり投げ』



『ショート綱引き』では、体育の時間を使って実践した。「チームワークが大切」「オリンピック種目になるといい」等の感想があった。また、本校におけるスポーツ集会の種目として選定し、活用している。

『スカッとやり投げ』では、２学年と４学年の仲良し縦割り班活動において、実践した。「投げると音がして楽しい。」「4年生に投げ方を教えてもらったので、遠くまで投げることができた」等の感想があった。



7 成果

自分たちが考えたオリジナル種目を自分たちが実践したことで、オリンピックを身近なこととして感じ取り、スポーツの楽しさを味わうことができた。

8 課題

○オリンピック、パラリンピックにおける興味・関心を持続させることやスポーツが苦手な児童に対しての支援の在り方
○オリンピック出場経験者（現役）を招きたい。

実践事例８　みやま市立二川小学校（福岡県）

1 取組、活動名

二川オリンピックの企画と運営

2 実施対象者

全校児童 225 名

3 展開の形式

教科名：体育、特別活動

4 目的、ねらい

児童が考えた種目を児童集会で行うことで、オリンピックを盛り上げる。
「運営で参加する（ボランティアで）」「選手で参加する」「サポーターで参加する」態度やスポーツを楽しむ心を育てる。

5 工夫

校内研究のテーマを体育の学習でとり、単元の最後に「○○オリンピック」と題して発表会や協議会を取り入れ、動きや技能向上のための意欲付けにオリンピックを活用した。

6 取組内容

「二川オリンピック」
①体力向上委員会で原案作成（1 ～ 6 学年で誰でも楽しめる競技）
②代表委員会で提案・決定
③８つの縦割り班選手決め・練習
④二川オリンピック
・大声チャンピオン
・ボーリング
・じゃんけんチャンピオン
・新聞から落ちたらダメ
・新聞びりびり
・障害物競走
・空き缶つみ
・豆つかみ
・みんなでなわとび
・段ボールころころ



テーマ V

スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

「長縄オリンピック」
　３分間縄跳びの全学年累計で記録に挑戦し、1500 回越えを８クラスでねらう。





7 成果

○オリンピックの名称を使った取り組みを通して、2020 年東京大会の認知度がほぼ 100%になった。
○児童集会等で種目を考える際に、誰でも楽しめること（年齢差・男女差・身長差など）を考慮し種目やルールを決めることを通して共生社会に向けた態度を養うことができた。

8 課題

○児童集会の内容がオリンピック、パラリンピックの内容とかけ離れているものが多かったため、より体育的な内容になるよう児童に働きかけをしていく。
○関連のあるものを組み合わせた計画になったので、系統的な学びになるよう計画していく必要がある。

実践事例９　長崎市立横尾中学校（長崎県）

1 取組、活動名

オリンピック、パラリンピックへの「観る・する・学ぶ・支える」関わり方

2 実施対象者

事前学習：全学年６クラス 173 名
事後学習：第１学年２クラス 59 名

3 展開の形式

教科名：道徳、英語
その他：掲示

4 目的、ねらい

オリンピック、パラリンピックへの関心を高める。また、「観る･する･学ぶ･支える」などの参加の方法があることを気づかせ、国際的な交流をいとわない生徒を育成する。

5 工夫

(1) 事前学習から事後学習までが、オリンピック、パラリンピックというテーマでつながりを持つように仕組んだ。
(2) 写真や動画など、視覚に訴える教材を多く使用した。
(3) 横尾中学校人権週間に合わせて、人権学習と関係性を持たせるように工夫した。

6 取組内容

(1) 道徳
① 2020 年東京大会には何歳になっているか把握させた。
②来年行われる 2018 年平昌大会について触れながら、日本で行われたオリンピック（札幌、東京、長野）についてクイズ形式で知らせた。
③ 1998 年長野大会時のスキージャンプのテストジャンパーとして参加した高橋竜二さんのドキュメンタリー番組の視聴をし、感想を発表させた。
④高橋竜二さんが支えるという立場でオリンピッ



クに参加したことを取り上げ、オリンピックには、「観る」、「出場する」以外にも「学ぶ」、「支える」といった参加方法があることを知らせた。

(2) 英語

①三省堂の「NEW CROWN1」の LESSON7 の「SPORTS FOR EVERYONE」で、障がいのある人のスポーツについて学んだ。

②英語での道案内の方法について授業を行った。

③授業で学んだ道案内の方法を生かし、2020 年東京大会を観に来た外国の方に道案内をする模擬体験をさせた。

④活動を通して、いろいろなオリンピックの支え方があることを気づかせるとともに、国際的な交流に関心を持たせた。





(3) 長崎県出身歴代オリンピアン、パラリンピアン巡回パネルの掲示



7 成果

(1) 事前学習から事後学習までが、オリンピック、パラリンピックというテーマでつながりを持つように仕組んだ結果、生徒たちは興味・関心が高く授業に望むことができた。

(2) 保健体育や英語、総合的な学習の時間と幅広い教科でオリンピック、パラリンピックの内容を取り扱ったことで、生徒にオリンピック、パラリンピックへの興味・関心を高めることができた。

(3) 学校通信や学年・学級通信、Web ページへの記載などを積極的に行ったことで、保護者との話題づくりにつながった。

(4) 横尾中学校の人権週間の時期と取り組み期間が重なったことで、人権学習にもつながった。

8 課題

(1) 事前・事後学習で使用する中学生向けの教材（VTR、指導案、来校するオリンピアン、パラリンピアンに係る資料）が今以上に充実するとありがたい。

実践事例 10　山鹿市立山鹿中学校（熊本県）

1 取組、活動名

教員とのディスカッション形式を取り入れたオリンピアンの講演

2 実施対象者

全校生徒 693 名

3 展開の形式

教科名：保健体育

4 目的、ねらい

○ 2020 年東京大会への機運を高める。
○オリンピアンの生き方を学ぶ。

5 工夫

○事前学習として保護者向けの講演会を実施し、家庭で生徒と講演内容に関する話をしてもらった後で、生徒向けの講演会を実施したこと。家庭での対話が生まれると共に、理解や思考の深まりが期待された。生徒向けの講演会の最後には川上氏と教員の代表がディスカッションの形式で対話することで、生徒に親近感を持たせ、意欲的に講演を聴くことができるようにした。

6 取組内容

(1) 事前学習（保護者向け講演会）
○川上優子氏（陸上競技長距離：マラソン／アトランタ大会 7 位，シドニー大会 10 位）を迎え、保護者向けの講演会を実施した。講演の内容について家庭で生徒に話をしてもらうことで、事前にオリンピアンに対する生徒の興味・関心を高めることを狙いとした。
○講演では、オリンピック競技大会に参加して感じたこと、陸上競技を始めてからオリンピック競技大会に出場するまでの経緯、陸上競技における夢、オリンピック競技大会に出場する過程で学んだこと（夢を叶えるために必要なこと、よき指導者像など）などについてお話いただいた。
(2) オリンピアンによる講演会（生徒向け）
○川上優子氏（同上）を迎え、生徒向けの講演会を実施した。講演では、「夢」

をテーマに、自分は何がしたいのか、何ができるのかということを生徒たちに考えさせる内容を、川上氏自身の経験をふまえてお話いただいた。どんな風に考え、練習を重ねてきたかを中心にお話いただいた。

(3) ディスカッション

〇教頭先生の進行による３つのテーマに関するディスカッション

登壇者　川上優子氏、内田先生（高校・大学でラグビー）、磯部先生（高校・大学でハンドボール　日本一を経験）

テーマ

①ケガや挫折の乗り越え方

②メンタル面の強化の仕方

③緊張せずにパフォーマンスを発揮する方法

7 成果

〇講師からいただいた講演内容からみた成果

①自分の「夢」に向かって努力することの大切さ

楽しさからはじめた駅伝であったが、悔しい思いも多く経験した。「駅伝で日本一になる」という自分の夢を叶えるために、練習を重ねたり、自分を高められる場所に身を置き、それらを通してオリンピック出場という貴重な経験もさせてもらえた。

②「自分を信じ続けること」

結果が出ないときにこそ、自分だけは自分のことを認めていた。これはメンタルの強さに関係なく、みんなができることだと思っている。

③「なる」と決めることによる行動や思考の変化

中学生は自分で判断ができる年齢。何をするべきかをきちんと自分で判断して、「なる」と自分で決めることで行動や思考が変わり、それがチャンスになる。

④スポーツによる人間形成と周囲の支援の大切さ

競技生活を続ける中で、よき指導者との出会いが自分をつくってくれたと感じる。自分で考えたり判断する力を身に付けられたのも、そのおかげである。私も指導者としての活動を徐々に始めているが、周囲の支援は競技者にとって非常に重要だと感じている。

２回の講演を通して、主に以上のような内容について、生徒やその保護者は理解を深めていった。

8 課題

(1) 講演会の最後に設けた質疑応答の時間が十分でなかったこと。

(2) オリンピアンに来校してもらうよい機会であったが、実技を関連させた内容は盛り込むことができなかったこと。

実践事例 11　熊本県立松橋支援学校（熊本県）

1 取組、活動名

ブラインドマラソン伴走者による講演

2 実施対象者

全校生徒 500 名　教職員 35 名

3 展開の形式

教科名：体育、LHR（ロングホームルーム）

4 目的、ねらい

2020 年東京大会への機運を高める。

5 工夫

講演の一部を、堀内氏と本校の教員の対談形式で進めたことで、より生徒の実態に合わせた内容となり生徒の理解が深まった。また、実技指導では、教員も一緒に参加することで、安全面への配慮をするとともに、気温が低い環境の中でも、授業を盛り上げることができた。

6 取組内容

パラリンピアンによる講演会及び実技指導

平成 29 年 11 月 17 日（金）に本校にて、道下美里氏（ブラインドマラソン：2016 年リオデジャネイロ大会銅メダル）の伴走者である堀内規生氏を迎え、講演会及び実技指導を行った。

(1) 講演

『魔法の絆（ロープ）』という題で行われた講演では、堀内氏が伴走者になった経緯、ブラインドマラソンにおける伴走の役割やルール、伴走を行ううえで難しい点、工夫している点、そして伴走を行うことを通して学んだことなどについてお話いただいた。





スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

さらに、道下選手を特集した動画や実際に 2016 年リオデジャネイロ大会のときの試合の動画を流しながら、堀内氏が道下選手の伴走を行う際に普段から心掛けていることや伴走を行うときのポイントについて説明いただいた。

(2) 実技指導

伴走の実技指導では、2 人組で、1 人がアイシェードをしてブラインドランナー役となり、もう 1 人が伴走者となり、ロープを持って練習を行った。校庭にある段差やカラーコーンを使って、コースをつくり、そのコースを歩いて 1 周することからスタートし、少しずつスピードを上げていく練習を行った。





7 成果

講演内容からみた成果

①仕事をしながら伴走者としてのトレーニングを行うために、毎日 4 時半に起きて練習を行っているというお話を通して、自分の目標を達成するためには、規則正しく生活すること、日々努力することなどが大切であることを学んだ。

②伴走者の役割は「目の代わりになること」であるが、そのためには、普段からコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことが重要である、というお話から、仲間を大切にして信頼関係を築くことの大切さを学んだ。

実技指導からみた成果

③ブラインドランナーの体験を通して、盲目の方の世界を体験した。

④伴走者の体験を通して、盲目の方に対するサポートの仕方の難しさを体験した。

最後に、質疑応答を行った。そこでは、生徒から堀内氏が伴走者を続ける理由や盲目の人が秀でていると感じる能力についての質問がでた。パラリンピックだけでなく、障がい者や障がい者を支える人に対する生徒達の興味が深まった。

8 課題

継続的に取り組んでいくための方策。

実践事例 12　千葉市立蘇我小学校（千葉市）

1 取組、活動名

ゴールボールの実践を通したパラスポーツの理解

2 実施対象者

児童 100 名

3 展開の形式

教科名：体育

4 目的、ねらい

モデル校でのパラスポーツに親しむ実践等を通して、体育・保健体育の学習を充実させ、児童がよりスポーツを好きになり、生涯にわたって運動に親しむ資質を育むこと、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図ることを目的とする。

5 工夫

コート数を増やすことによって運動量を確保することができた。ボールに勢いをつけようとするあまり、放り出してしまうようになったので「転がす」ことを常に意識させた。

ボールが転がる音に集中させるため、静かにする必要があるが、低学年の児童たちにとって難しい。そこで、プラカードを活用したり、余計な音や声を出さないルールを取り入れたりした。



6 取組内容

(1) ボールについて

ねらい①では、様々な大きさ･重さのボールを選択できるようにした。ゲームの中でそれぞれのボールの特徴に触れさせた。ねらい②では、目隠しをするため、転がした際に音が鳴るよう工夫した。また、体にあたっても痛くないよう、ボールは ①鈴入りソフトタッチボール ②ソフトバレーボール（高学年用）をスーパー等のビニール製手提げ袋に入れたもののいずれかを使用した。

(2) アイマスクについて

目隠しは、アイマスクを共同購入費で一括購入し、使用した。その際、

衛生面から、貸し借りはしないように指導し、ビニール袋などに入れて個人で管理させた。

(3) 場について

ねらい①は、ゴールとなるカラーコーンの間隔の大小や、投げる距離によって得点が変わるルールを設定した。ねらい②は、投げる距離によってのみ、得点が変わるようにした。

ボールの転がる音を聞きながら動くことから、周囲が静かにしなければならないため、実況・補助係の児童が「おしずかに」と言ってプラカードを掲げ注意を促すこと、その際は、周囲の児童は口を閉じることをルールとして設定した。



7 成果

(1) 関心・意欲面

○授業に対して大変意欲的に取り組む姿勢が見られた。特に、目隠しをしてゲームに取り組むことに対して楽しみを見出した児童が多くいた。

○ねらい②では、自分の転がしたボールの軌跡がどうだったかを友達に尋ねたり、同じチームの児童に「ここを狙うといいよ」などと教え合ったりする姿が見られた。

(2) 思考面

○ねらい①からねらい②へ移行したところで、どのように投げたら得点できるかを工夫する姿が見られた。例えば、そっと足音を消して移動し、ゴールの端を狙う児童や勢いをつけてボールを転がす児童などが見られた。守りについても、どのタイミングで体を投げ出して守ったらよいのかを試行錯誤する姿が見られた。

(3) その他（オリパラアンケートより）

○オリンピックを「とてもよく知っている」と回答した児童の割合が、事前では、42.4%であったが、事後では 60.6%に増加した。

8 課題

○評価について、特に、技能面の評価については、「ねらった方向へまっすぐに転がす」「目隠しをした状態でボールの転がる音をよく聞いてゴールを守る」としたが、これが妥当かどうか、検討が必要である。

○声を出して話をすることが難しいため、児童相互で喜びを分かち合ったり、得点のこつを共有したりすることが難しかった。

実践事例協力校一覧

【小学校】

宮古市立山口小学校（岩手県）
白石市立大平小学校（宮城県）
南三陸町立志津川小学校（宮城県）
福島市立吉井田小学校（福島県）
筑西市立新治小学校（茨城県）
流山市立小山小学校（千葉県）
成田市立久住小学校（千葉県）
松戸市立大橋小学校（千葉県）
能登町立宇出津小学校（石川県）
伊豆市立修善寺南小学校（静岡県）
東広島市立小谷小学校（広島県）
福山市立霞小学校（広島県）
久留米市立大城小学校（福岡県）
みやま市立二川小学校（福岡県）
札幌市立信濃小学校（札幌市）
札幌市立澄川小学校（札幌市）
千葉市立蘇我小学校（千葉市）
大阪市立木川南小学校（大阪市）
北九州市小森江東小学校（北九州市）
北九州市立長尾小学校（北九州市）

【中学校】

盛岡市立上田中学校（岩手県）
盛岡市立厨川中学校（岩手県）
栗原市立栗駒中学校（宮城県）
仙台市立田子中学校（宮城県）
水戸市立緑岡中学校（茨城県）
松戸市立小金中学校（千葉県）
金沢市立北鳴中学校（石川県）
伊豆の国市立大仁中学校（静岡県）
糸島市立前原東中学校（福岡県）
長崎市立横尾中学校（長崎県）
山鹿市立山鹿中学校（熊本県）
千葉市立蘇我中学校（千葉市）

【高等学校】

千葉県立一宮商業高等学校（千葉県）
岐阜県立関高等学校（岐阜県）
京都府立西乙訓高等学校（京都府）
兵庫県立社高等学校（兵庫県）
高知県立高知丸の内高等学校（高知県）
京都市立日吉ケ丘高等学校（京都市）

【特別支援学校】

千葉県立桜が丘特別支援学校（千葉県）
千葉県立矢切特別支援学校（千葉県）
岐阜県立岐阜盲学校（岐阜県）
岐阜県立岐阜聾学校（岐阜県）
京都府立聾学校（京都府）
熊本県立松橋支援学校（熊本県）

平成 29 年度スポーツ庁委託事業
オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業
実践事例集

平成 30 年 7 月発行

編集・発行
筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）
　茨城県つくば市天王台 1-1-1 GSI 棟 204

日本体育大学オリンピック･パラリンピック･ムーブメント全国展開事業（N-COPE）
　東京都世田谷区深沢 7-1-1

早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター（ROPE）
　埼玉県所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学所沢キャンパス 100-427

印刷会社名　マザータンク

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

平成29年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

実践事例集